那 珂 47

―那珂遺跡群第109次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第937集

（SE143出土絵画土器）

2 0 0 7

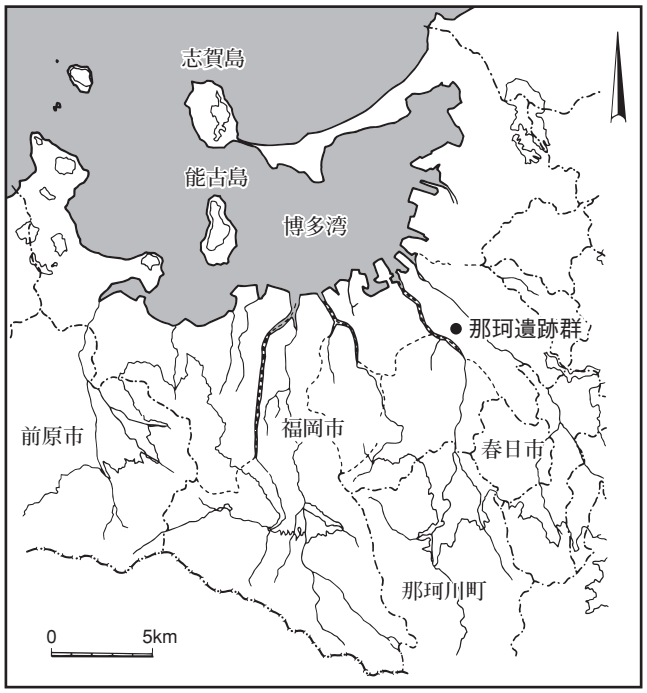
福 岡 市 教 育 委 員 会

NA　KA

那　珂　47

－那珂遺跡群第109次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第937集



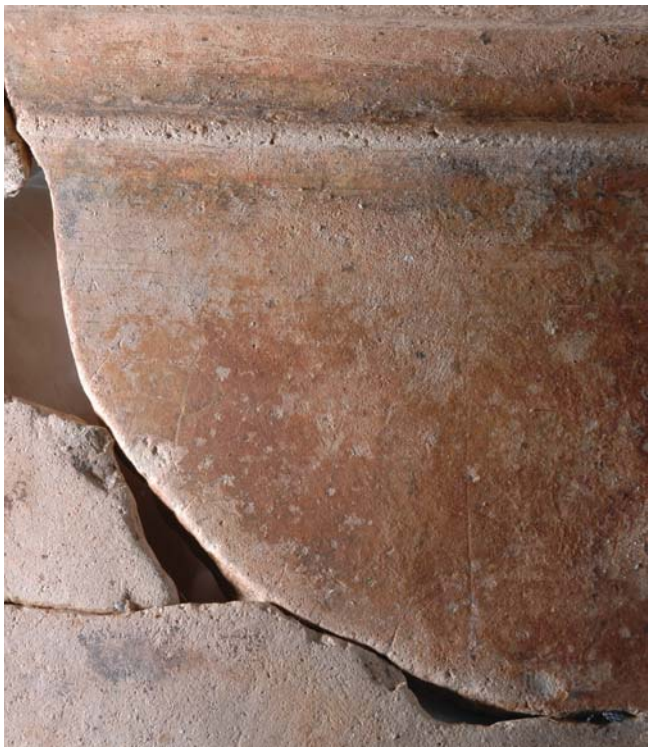
遺跡番号　NAK-109
調査略号　0541

2007

福岡市教育委員会

SE 143 出土絵画甕棺

戈と盾



鹿？と戈

序

福岡市では北方に広がる玄界灘の海を介し大陸と人、物、文化の交流を絶え間なく続けてきました。この地の利を生かした人々の歴史を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれ明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術や文化を示す貴重なものも多く、学術研究上、各時代とも重要視されているところです。

本調査地点は弥生時代において「奴国」の拠点の一つとして全国の中でも特に繁栄を極めた那珂遺跡群に含まれています。今回、弥生時代終末の竪穴住居跡からなる集落や古墳時代初頭の方形周溝等が発見されましたが、その中でも弥生時代中期末の井戸から出土した戈と盾が描かれた甕棺は当時の祭祀行為や観念を知る上で注目されます。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく、多様な開発で消滅する埋蔵文化財について実施した記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力いただいた廣田隆史様、株式会社檀建築設計事務所をはじめ関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成19年３月30日

福岡市教育委員会

教育長　植　木　とみ子

例　　言

1．本書は福岡市博多区東光寺町90番地内において福岡市教育委員会が2005年度に実施した発掘調査報告書である。

2．調査費用には受託費のほか個人事業として国庫補助金を充当した。

3．調査は荒牧宏行が担当し、遺構図面作成は荒牧、藤野雅基、小野千佳、高手興志子が行い、遺構写真撮影は荒牧が行った。

4．本書に掲載した遺物実測は濱石正子、相原聡子、荒牧、浄書は濱石正子、大石菜美子、荒牧、遺物写真撮影は荒牧が行った。

5．本文は荒牧が執筆、編集した。

6．本書掲載の実測図、写真、遺物等、調査で得られた資料類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管され、公開、活用されていく予定である。

凡　　例

1．本書掲載の遺構図座標、方位は旧日本測地系（第Ⅱ系）による。方位は真北より0°19′西偏する。

2．掲載した遺物は土器、石器、金属器等の各種別に通し番号を付した。

遺跡調査番号	０５４１		遺跡略号	ＮＡＫ－１０９	
地　　番	博多区東光寺町90番地		分布地図番号	雀居２３	
開発面積	１０１５㎡	調査対象面積	３００㎡	調査面積	１９８㎡
調査期間	平成17年８月22日～11月９日				

本 文 目 次

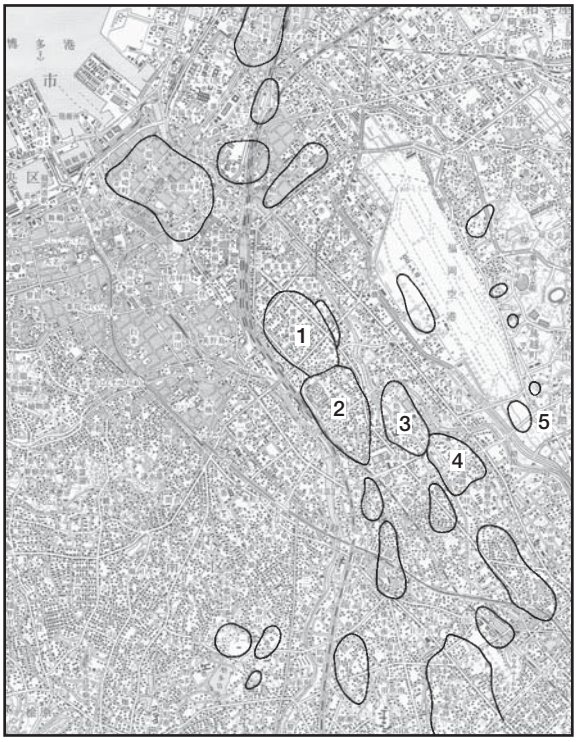
Ⅰ　はじめに …… 1
1．調査に至る経過 …… 1
2．調査の経過 …… 1
3．調査体制 …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 1
1．地形 …… 1
2．歴史的環境 …… 1
Ⅲ　調査の記録 …… 2
1．概要 …… 2
2．基本層序 …… 4
3．遺構と遺物 …… 4
（1）竪穴住居跡（SC） …… 4
SC106 …… 7
SC107 …… 8
SC108 …… 9
SC18 …… 10
SX66 …… 12
（2）溝（SD） …… 15
SD110 …… 15
（3）井戸（SE） …… 20
SE143 …… 20
（4）土壙、その他 …… 24
SB01 …… 24
SK99 …… 24
SX142 …… 26
SK70 …… 26
SK112 …… 26
Ⅳ　おわりに …… 26

挿図目次

Fig. 1　那珂遺跡群と周辺遺跡群（1/10万）…… 目次
Fig. 2　調査区周辺旧地形図（昭和初期 1/8,000）…… 2
Fig. 3　那珂遺跡群と既往調査位置図（1/8,000）…… 3
Fig. 4　調査区位置図（1/500）…… 4
Fig. 5　那珂109次遺構配置図（1/100）…… 5
Fig. 6　SC106、147実測図（1/60）…… 7
Fig. 7　SC106、147出土遺物実測図（1/4）… 7
Fig. 8　SC108実測図（1/60）…… 9
Fig. 9　SC108出土遺物実測図（1/1、1/3、1/4）…… 11
Fig.10　SC18実測図（1/60）…… 12
Fig.11　SC18カマド実測図（1/40）…… 12
Fig.12　SC18出土土器実測図（1/4）…… 13
Fig.13　SC18出土石器・鉄器実測図（1/3、1/2）…… 13
Fig.14　SX66実測図（1/60）…… 15
Fig.15　SX66出土遺物実測図（1/4）…… 15
Fig.16　SD110、SE143実測図（1/40）…… 16
Fig.17　SD110出土遺物実測図（1/4）…… 16
Fig.18　SE143出土絵画土器実測図（1/6、1/2）…… 19
Fig.19　SE143出土遺物実測図1（1/4）…… 20
Fig.20　SE143出土遺物実測図2（1/4）…… 21
Fig.21　SE143出土遺物実測図3（1/4）…… 22
Fig.22　SE143出土木器実測図（1/6）…… 23
Fig.23　SB01実測図（1/60）…… 24
Fig.24　SK99、142、70、112実測図（1/40）… 25

（写真）

Ph. 1　調査区東半全景（西から）…… 6
Ph. 2　調査区西半全景（南から）…… 6
Ph. 3　SC106、147完掘（西から）…… 8
Ph. 4　SE108完掘（南から）…… 9
Ph. 5　SC108出土遺物 …… 10
Ph. 6　SC18完掘（南から）…… 14
Ph. 7　SC18カマド遺物出土状況（南から）… 14
Ph. 8　SX66（南から）…… 14
Ph. 9　SC18カマド完掘（西から）…… 14
Ph.10　SD110（北から）…… 17
Ph.11　SD110遺物出土状況（南から）…… 17
Ph.12　SD110土層（西から）…… 17
Ph.13　25、26遺物出土状況（西から）…… 17
Ph.14　SE143遺物出土状況（西から）…… 18
Ph.15　SE143最下底遺物出土状況 …… 18
Ph.16　SE143出土絵画甕棺 …… 18
Ph.17　SK99完掘（南西から）…… 25
Ph.18　SX142完掘（東から）…… 25



1比恵遺跡群　2那珂遺跡群　3那珂君休遺跡群
4板付遺跡群　5下月隈Ｃ遺跡群

Fig.1　那珂遺跡群と周辺遺跡群（1/10万）

Ⅰはじめに

１．調査に至る経過

平成17年5月10日、廣田隆史氏より福岡市博多区東光寺町2丁目90番地内における共同住宅建設計画に伴って「埋蔵文化財の有無について（照会）」の文書が埋蔵文化財課に提出された。これを受けて当課では書類審査を行った。当該地は平成15年度に別の設計で申請が出され、試掘調査を実施し遺構を確認していた。今回、改めて試掘結果と工事内容を検討し調査が必要と判断した。この判断のもとに施主の廣田隆史氏、檀建築設計事務所と調査範囲、期間や費用について協議を重ね、平成17年8月22日に調査を開始するはこびとなった。発掘調査は下記の理由により一時中断したが、同年11月9日に終了した。

２．調査の経過

工事施行の敷地1015㎡に調査対象地は南側の建物建設予定地の約300㎡に限られた。(Fig.4)

遺構面まで170～230cmと深く、場内での廃土置き場は北側の調査対象外地のみでは足らず、南側の調査区を東西に2分割し、調査区と廃土置き場を反転して調査を行った。

調査は東半分から始めたが、9月12日に終わった時点で敷地内を隣接する住宅に向かって水道管と電気ケーブルが通っていたので、移設されるまで西側の調査を行うことができず、中断することになった。移設が済み再開したのは10月20日で全調査が終了したのは同年11月9日であった。

３．調査体制

調査・整理作業は以下の体制で臨んだ。

【調査主体】福岡市教育委員会　【調査総括】埋蔵文化財課長　山口譲治　調査第2係長　池崎譲二（前任）【庶務】文化財整備課　鈴木由喜　【試掘調査・協議】事前審査係長　濱石哲也　担当　本田浩二郎　【調査担当】荒牧宏行　【調査作業員】黒瀬千鶴　武田潤子　安高精一　藤野雅基　小野千佳　二宮白人　高手興志子　兼田ミヤ子　酒井次憲　豊丸秀仁　永田八重子　渋谷留雄　濱 フミ子　安高邦晴　知花繁代　坂本久幸　沖 政芳　【資料整理】濱石正子　松下伊都子　小金丸昌世　大石菜美子　相原聡子

Ⅱ　位置と環境

１．地形

調査地点は那珂遺跡群中央部の東縁辺に位置する。東側約10mには諸岡川と合流した御笠川が北流している。昭和初期の古地図（Fig.2）では諸岡川からの水路が近接し、御笠川本流との距離は現在より離れている。

調査で確認された遺構面の鳥栖ロームは標高6.35～7.0mで東側へ下降していく。御笠川旧流路の正確な位置は不明であるが、現在の流路内で開析を受け崖状に落ちていたものと思われる。

２．歴史的環境

周辺の那珂遺跡東側縁辺の調査事例は少ないが、北側の同じく御笠川沿いの第102次調査では南北に延びた古代官道に伴う溝が検出された。この官道は大宰府東門から発し、那珂君休3次で検出され

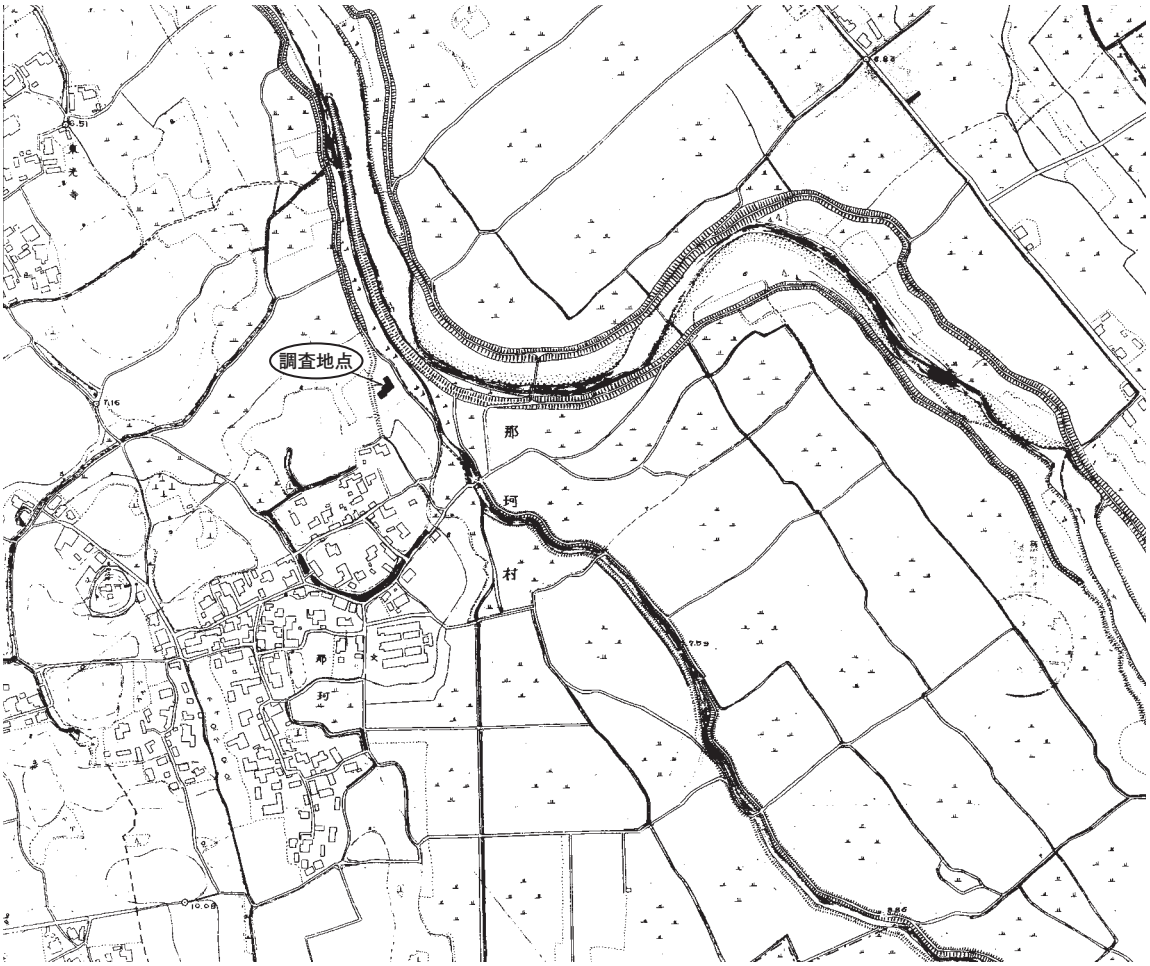


Fig.2　調査区周辺旧地形図（昭和初期　1/8,000）

た溝に通じ、本調査地点東側の御笠川にぶつかるルートが推定されている。この場合、本調査地点東側の蛇行する御笠川を近接して2度渡ることになり、この範囲の流路や直線的なルートを検討する必要がある。今回、奈良時代の竪穴住居跡が検出されたが、官道と集落との関連が注意される。

南西側の沖積地に立地した那珂久平、那珂君休遺跡では弥生中期から中世までの水田面が検出されている。このような沖積地を臨む台地縁辺に弥生終末から古墳初頭の遺構や遺物が多く検出、出土した事例が増えている。北側の同じく洪積台地からなる比恵遺跡の71次、83次や沖積地に立地した下月隈C遺跡などがあげられる。当109次で検出された弥生終末期から古墳初頭の竪穴住居や方形周溝遺構は18年度に調査した隣接地の112次調査と合わせ周辺に広く分布していることが予想される。

Ⅲ　調査の記録

1．概要

検出された主な遺構は奈良時代の竪穴住居跡1軒、方形大型土壙1基、古墳初頭の方形周溝1基、弥生後期後半から終末の竪穴住居跡3軒、溝状遺構1基、弥生中期末の井戸1基、時期不明の木棺墓1基である。特に注目されるのは方形周溝と重なりあった弥生中期末の井戸から戈や盾を描いた甕棺片が出土したことである。なお、18年度に隣接した範囲が112次として調査され、弥生終末から古墳初頭の竪穴住居や方形周溝（墓を含む）の構成や広がりが明らかになってきた。

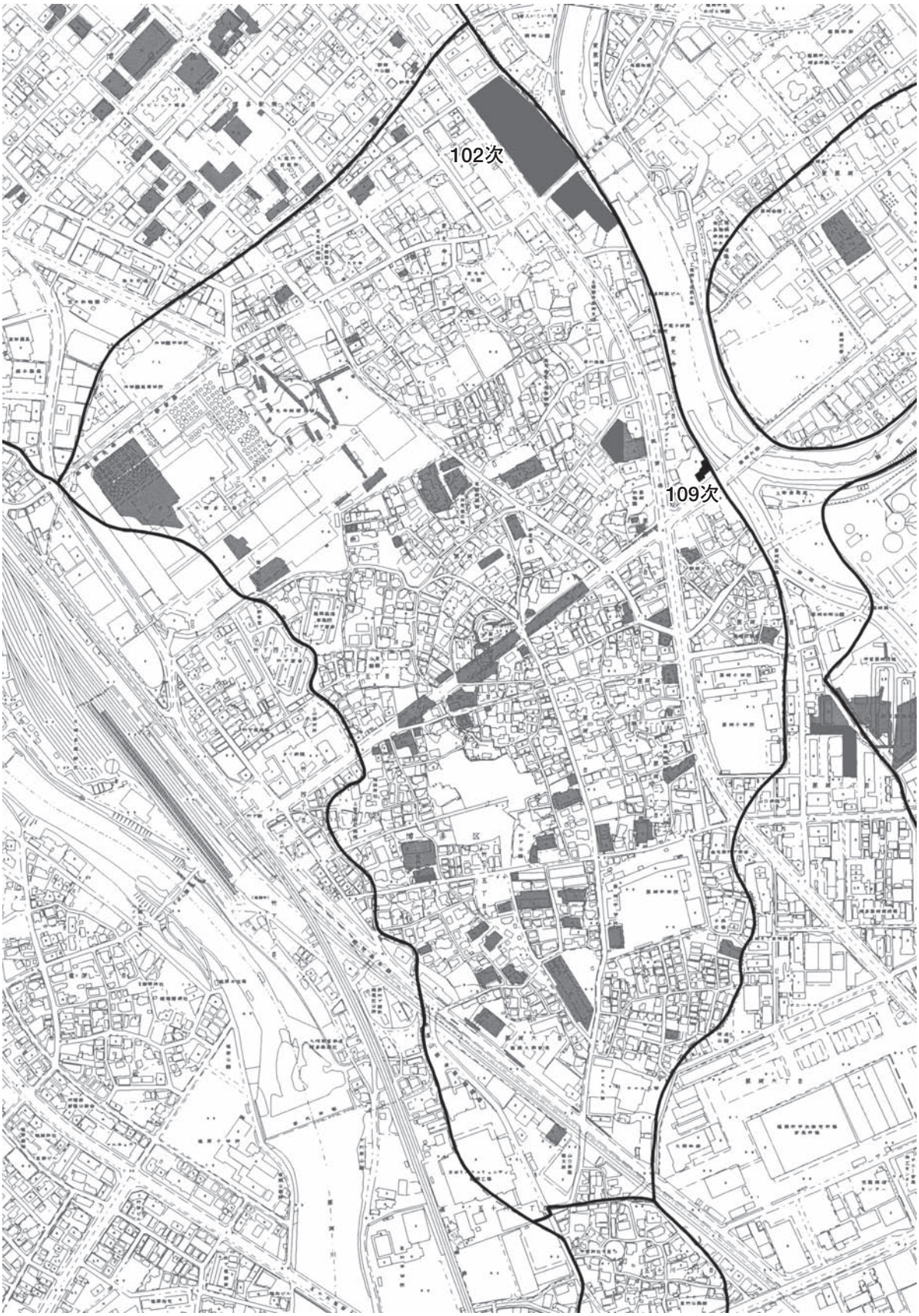
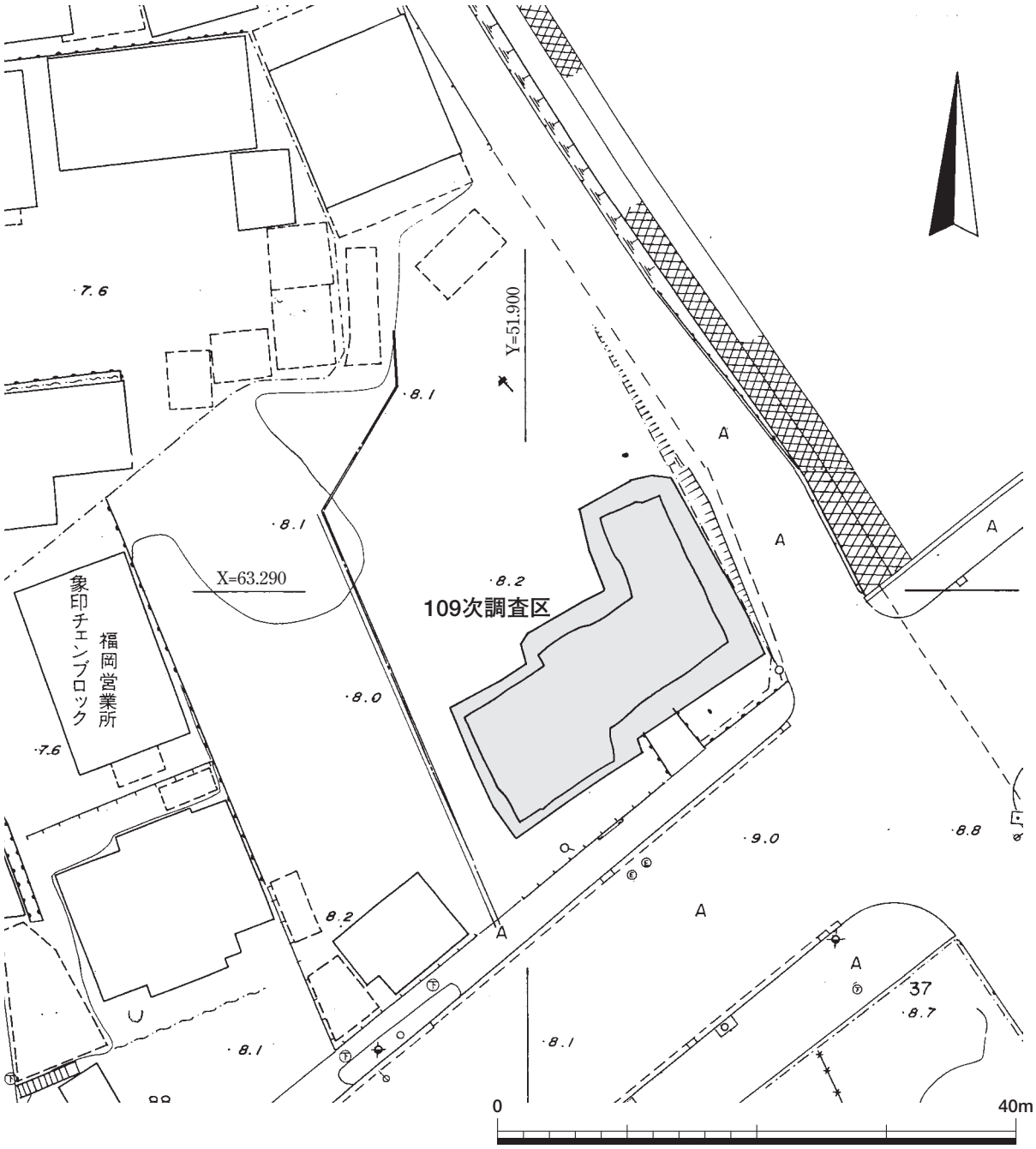


Fig.3　那珂遺跡群と既往調査位置図（1/8,000）



2．基本層序

1.4～1.8mの客土下に以前の水田耕作土とみられる黒灰砂質土が堆積する。その下に褐色の包含層が厚さ15cmで堆積し、その下層に遺構検出面であり地山の鳥栖ロームが堆積する。この鳥栖ロームは東側の御笠川にむかって標高7.0～6.35mで傾斜している。

3．遺構と遺物

（1）竪穴住居跡

調査区西際で弥生後期後半から終末にかけての3軒の竪穴住居跡が検出された。その中のSC106とSC108は方向が平行し近接している。その間にSK142が同じく方向を一にして掘削されていることから強い関連が窺える。

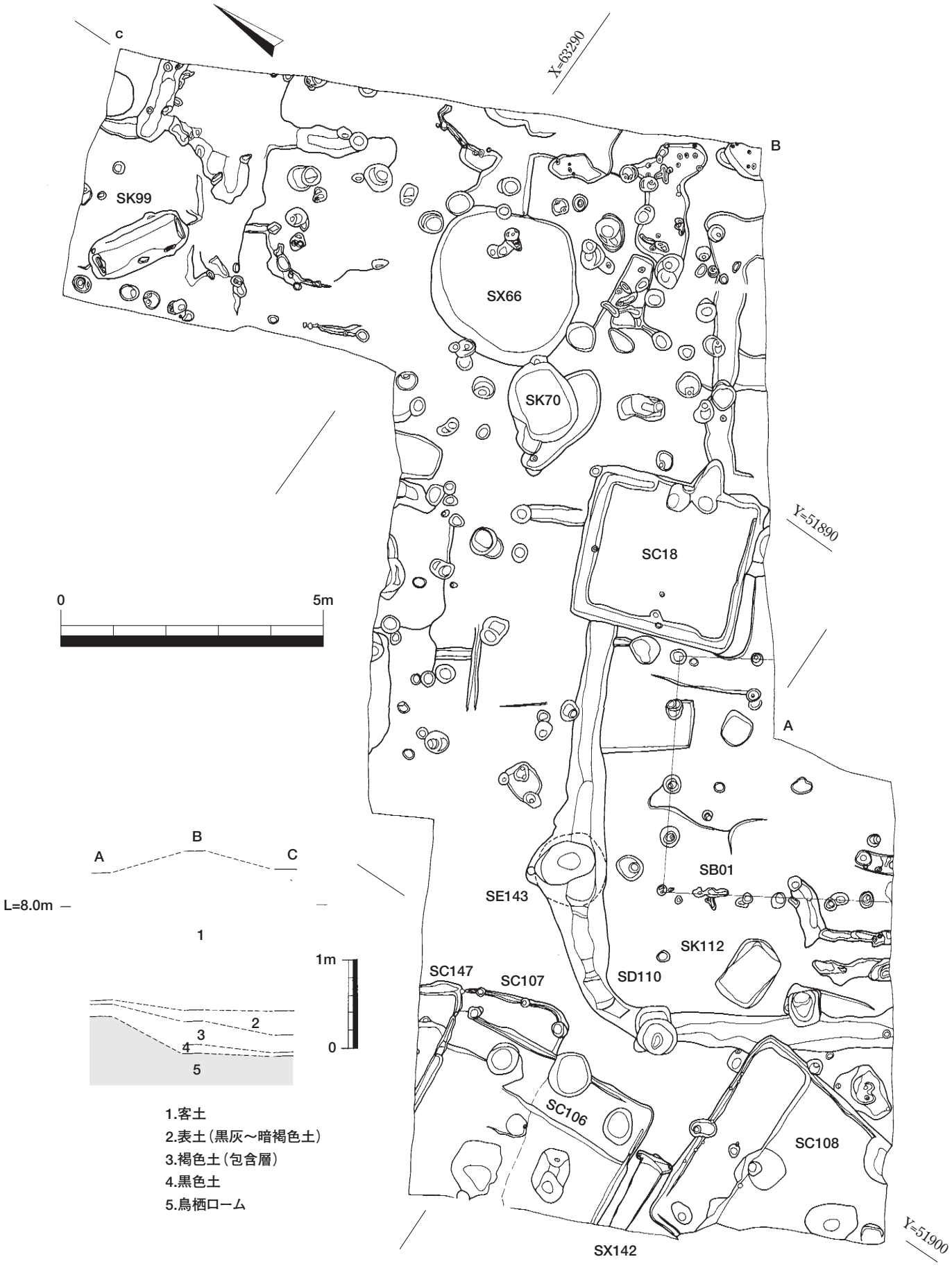


Fig.5　那珂109次遺溝配置図（1/100）

Ph.1　調査区東半全景（西から）

Ph.2　調査区西半全景（南から）

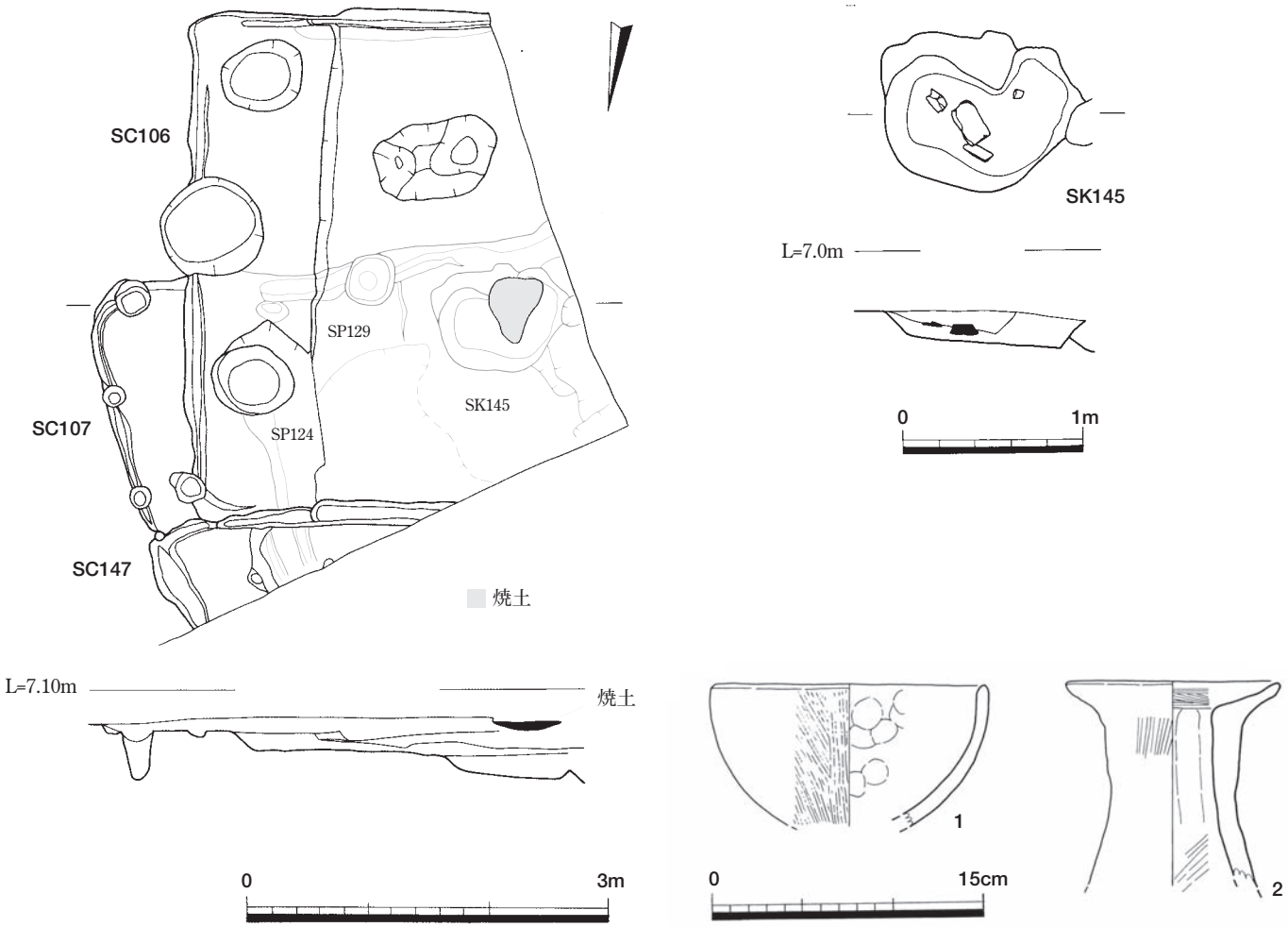


Fig.6　SC106、147実測図（1/60）

SC106

やや方向を異にするSC147を切って検出された。規模が判る東辺は4.3mを測り、この東辺側に幅1.2m、高さ約10cmのベッドが付設されていた。ベッド部分には貼り床土は殆どみられず、造り出されたものと考えられる。壁高は15cmが遺存し、ベッドを有した東辺際では不明瞭であるが、南北両辺では幅10～14cmの壁溝が検出された。床面からの深さは7cm程度である。

中央部から43×55cmの不整形プランを呈した焼土面が検出されたがそのレベルは床面から約10cm高く、SC106に伴うものか疑問である。深さは約7cmを測る。なお、この焼土面の下部より切り合った竪穴住居跡SC107に付設していると考えられる土壙SK145が検出された。

主柱穴は中軸線上のベッド落ち際で検出されたSP129と考えられる。床面上では判らず、貼り床土を除去した時点で検出

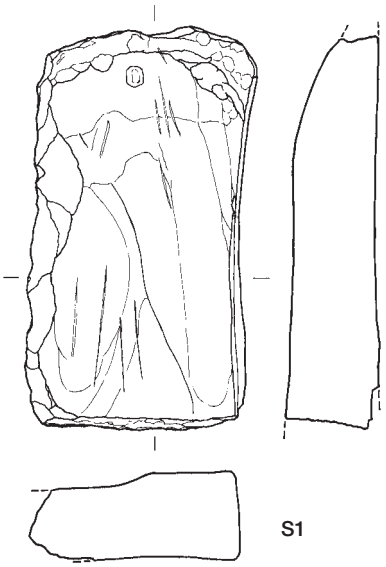
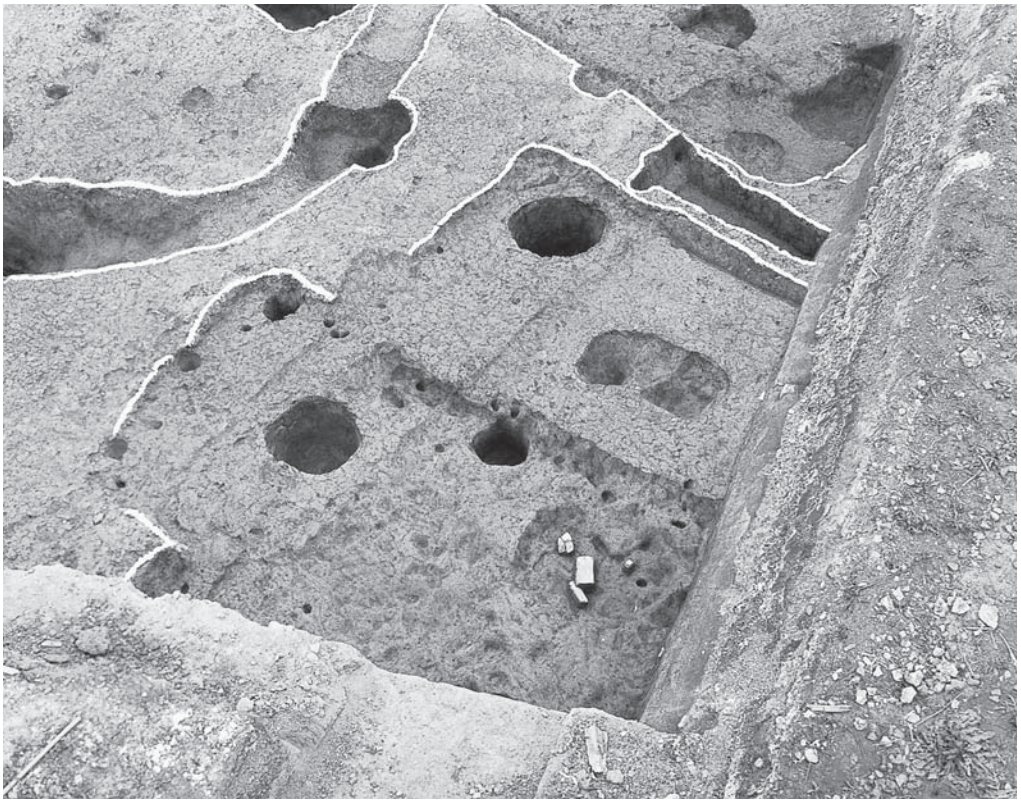


Fig.7　SC106、147
出土遺物実測図（1/4）



Ph.3　SC106、107完掘（西から）

された。径40cm、床面からの深さ50cmを測る。また、後述のSC106と同様にベッドのある南東角からは深さ70cmのSP124が検出された。

出土遺物

1は土の上部焼土面から出土。湾曲した体部の鉢は外面縦ハケ、内面ナデを施す。胎土には砂粒を多く含み、灰白色を呈す。2は床面近くから出土した器台である。外面と内面の大きく開いた受部と裾部に粗いハケメを残す。

SC107

SC106と主軸方向を異にして、半分程が大きく重なり合っていた。切り合い関係は不明瞭ながらSC106のベッドの延長が確認できたので、これに切られているものと判断した。

検出されたプランは歪な方形を呈すが、辺長は確認できず規模、形状は不明である。中央部床面のレベルはSC106より6cm低いが、東辺側はこれより10cmほど高辺いために、SC106同様に東辺側にベッドが造り出されていたものと考えられる。壁溝は不明瞭ながら東辺と切り合った南辺際で断続的に検出された。

主柱穴、炉跡は不明であるが、切り合った南辺のほぼ中央に80×100cmの不整形の土壙SK145を検出した。このSK145は貼り床土を除去して検出され、最も深い部分は床面から約30cmを測る。底部は起伏が大きい。この土壙からは砥石Ｓ1と砂岩片が出土した。

出土遺物

S1はSK145から出土した砂岩製の砥石である。砥面は図示した表裏と右側縁にみられる。特に右側縁は研ぎ込まれ湾曲している。SK145からはS1の他に粗く脆い、熱を受けた砂岩片も出土した。

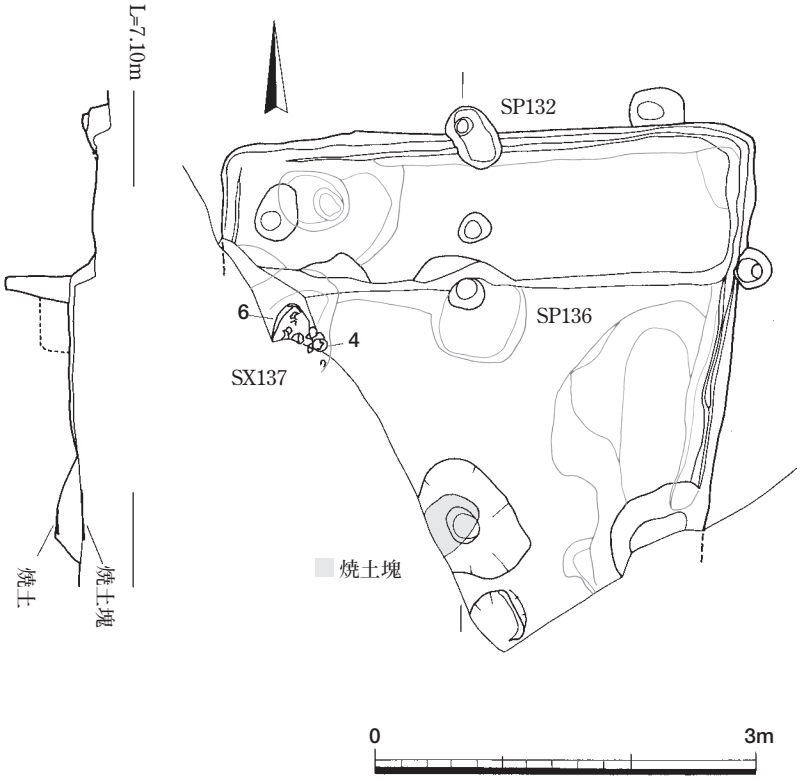
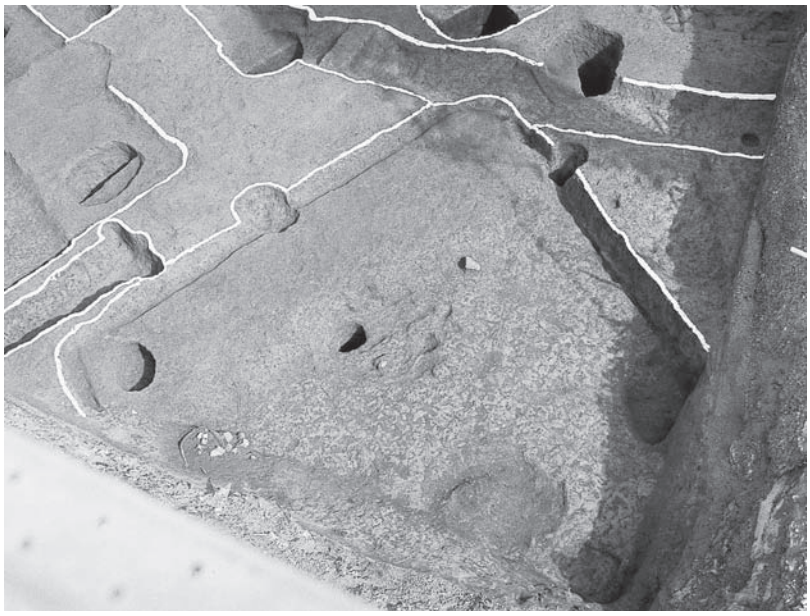


Fig.8　SC108実測図（1/60）



Ph.4　SE108完掘（南から）

SC108

調査区西際で検出され、SC106と方向を同じくしている。このSC106との間には主軸方向を同じくした溝状のSK142が掘削され、関連が注目される。

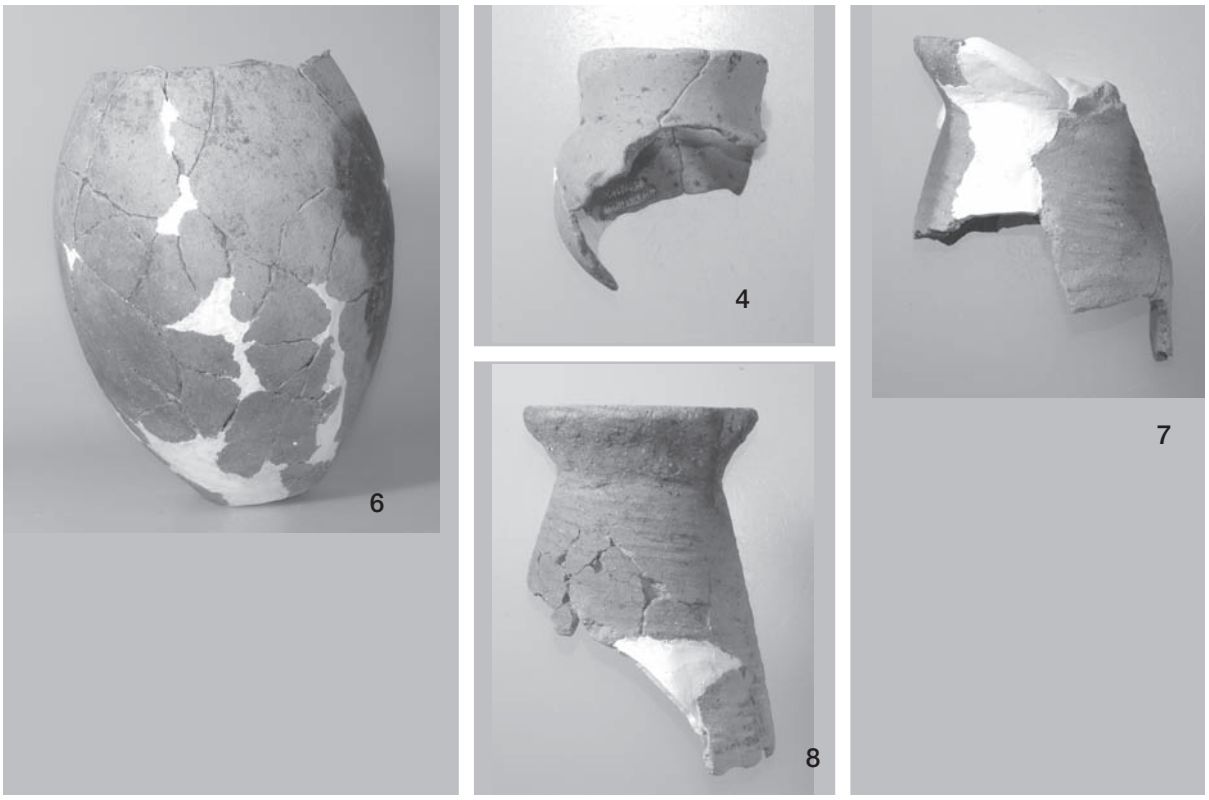
規模が判る北辺は4.2mを測り、SC106の東辺長とほぼ同じである。壁高25cm が遺存し、北辺側に幅110cm、高さ18cmのベッドが付設されている。ベッド部分は北西角に貼り床土がみられたが、大半は造り出しである。

壁溝は床面を少し下げた時点で明瞭となり、幅20～25cm、深さ10～18cmを測る。東辺際の当初、床面上で検出された幅6cm内外の溝は壁の板痕を示している可能性がある。

中央において径40～50cmの範囲内に焼土面が検出され炉跡と考えられる。掘り込みは更に大きく径70～100cmの楕円形プランを呈し、深さ16cmを測る。この主軸延長上のベッド落ち際に主柱穴とみられるSP136が検出された。床面上で検出した径25cmの柱穴部分は柱痕とみられ、貼り床土を除去すると、径70cmの掘方が検出された。柱痕の深さは54cmを測る。さらに延長した北辺際に小柱穴SP132が検出された。深さは20cm程で浅い。また、北西角のベッド内からも柱穴が検出され、SC106と類似する。

西辺寄りの調査区際で土器片が集中するSX137を検出した。甕6は床面より10cm程浮いたレベルから出土し、小壺4は床面直上から出土した。他の小片は概ねこの2点のレベル内におさまる。

貼り床土は深く掘り込まれた北西角と東辺際に厚くみられた。いずれも不整形のプランを呈し、深さは床面より40～50cmを測る。



Ph.5　SC108出土遺物

出土遺物

M1のガラス玉は床面から出土。コバルトブルーに発色している。S2は粘板岩製と思われる砥石で条痕がみられる。3～6は土器が集中したSX137から出土。3の小形鉢は小片であるため底部の形状は不確実である。内外面ナデ調整であるが、内面にミガキと思われる部分がみられる。4は精製の直口小形壺である。外面は不明瞭ながらミガキがみられ、内面は粗いハケメを消すナデを加えている。5は短い口縁部が外反した鉢形の精製土器である。外面ミガキ、内面はナデ調整を施すが、口縁部に部分的にミガキがみられる。瓦質に近い灰色から黒灰色を呈す。6は約半分程が遺存する。内外面にハケメを残し、底部は丸みをもった平底である。7～12は埋土中から出土。７、8は同形の器台である。外面体部にタタキ、内面に絞りとナデの痕跡を粗く残す。7は体部の外側に外反した口縁部を接合した痕跡が明瞭に残る。8の口縁部内面は粗くナデ回し、端部が段状となる。接地する脚端部は窄まり丸く収める。9は袋状口縁、10は頸部に刻み突帯を有した壺片、11の断面台形状の刻み突帯を有した甕片と同一個体とみられる破片には外面に縦ハケを残し、内面横位から斜位のハケメを施す。12の甕口縁の内面はナデ調整。13は小さな平底を有し、長胴の甕とみられる。内外面ナデ調整。胎土に砂粒を多く含む。14の壺底部はわずかに丸みをもつ。外面に粗いミガキ、内面体部に斜位の粗いハケメを施すがナデによって不明瞭となっている。

SC18

調査区中央で検出され、方形周溝のSD10を切っている。南北辺が3.0m、東西辺がやや長く3.2mを測る方形プランを呈す。壁高は25cmが残り、カマドが設置された東辺周辺を除き幅広い20～30cm程度の周溝が掘り込まれている。深さは5cm以下と浅い。

カマドは東辺の中央よりやや南寄りに設置されている。検出された煙道部の延長は70cm、開口し

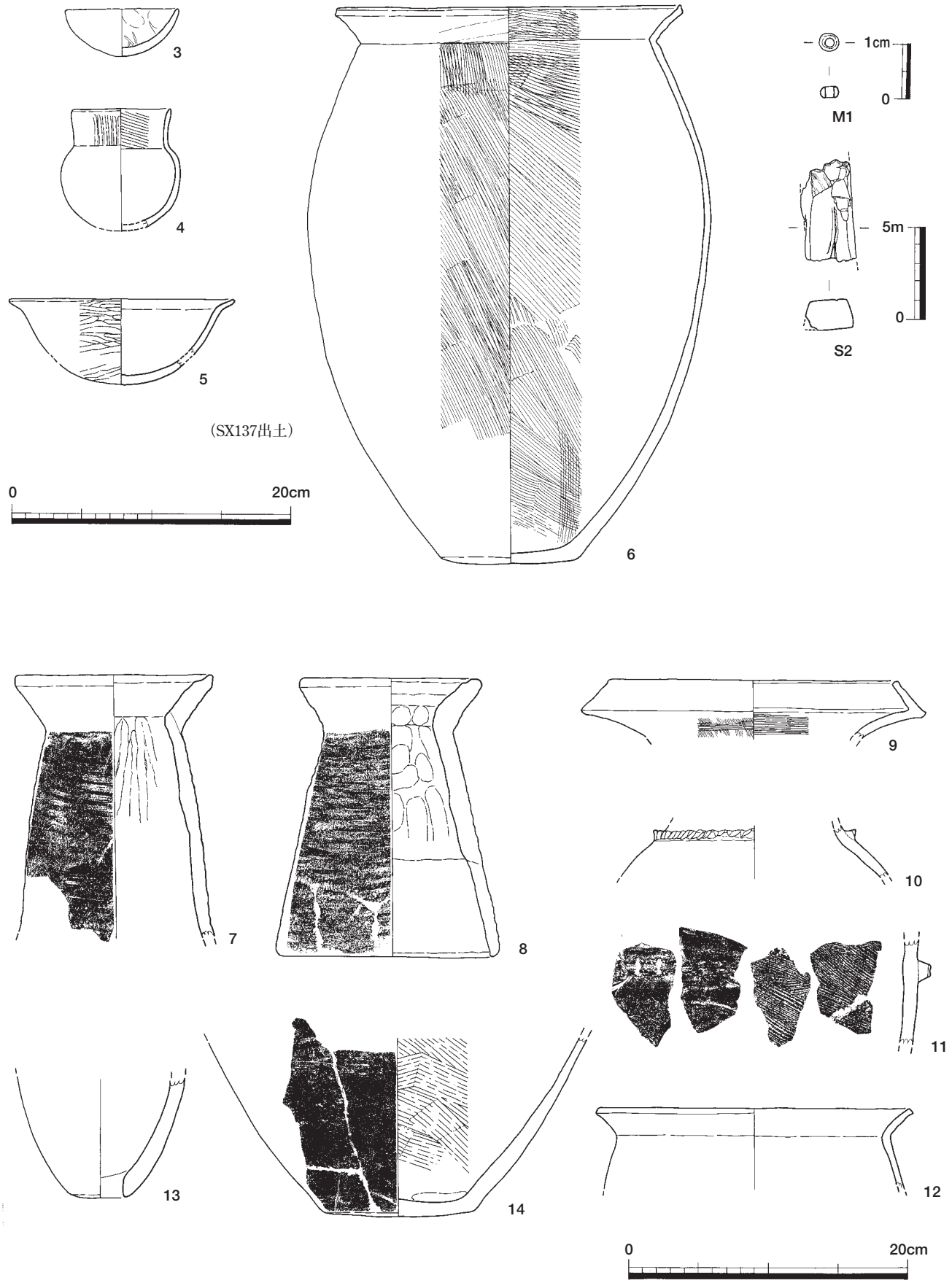


Fig.9　SC108出土遺物実測図（1/1、1/3、1/4）

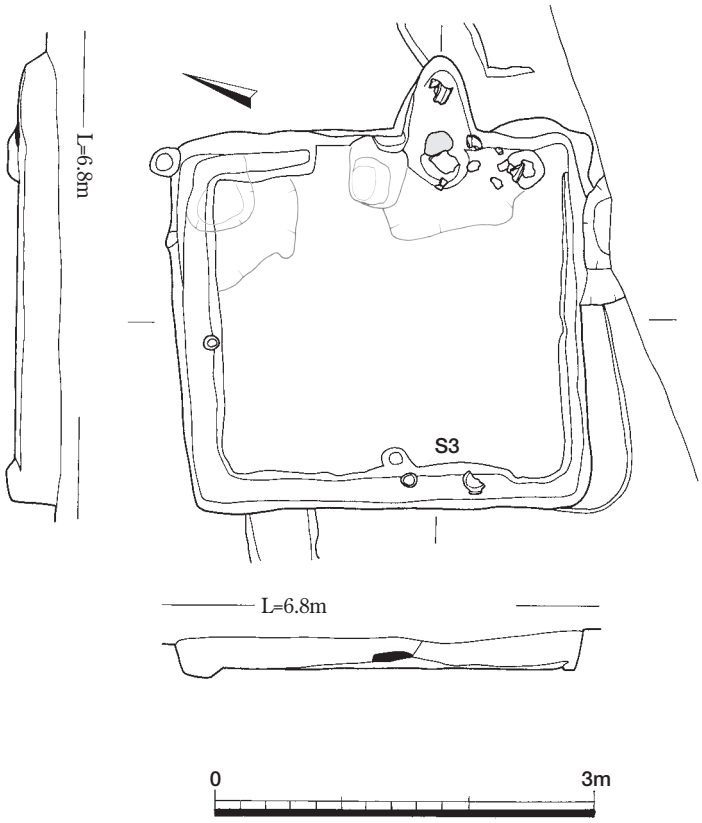


Fig.10　SC18実測図（1/60）

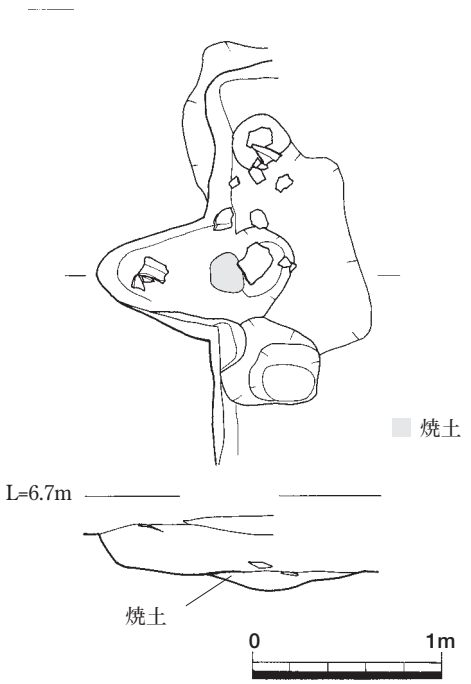


Fig.11　SC18カマド実測図（1/40）

た焚口付近の幅（下端）は53cmを測る。焚口部の焼土面は竪穴部の落ち際に径約20cm程度で分布していた。

燃焼部を構成する壁体袖部は左側のみ検出された。焚口が上述の位置にあるために袖部は内側にはほとんど延びないと考えられるが、白色粘土混じりの土で構築された幅25cm、延長15cmの短い範囲を確認した。なお、この左袖部の下部には切られた以前の柱穴が検出された。焚口の前面には袖部を含む広い範囲に掘り込みがあり、貼り床土で充填されている。

主柱穴は竪穴内部からは検出されなかった。貼り床土は掘り込まれた北東、南東角および、西辺際に厚くみられた。この西辺よりの床面には灰白色粘土の小ブロックが塊にはなっていないが、散在した状態でみられた。

出土遺物

15～18は須恵器である。15、16の高台は体部との境よりやや内側に貼り付けられ、16は完形に近く、体部は直に近い立ち上がりである。17の高台は体部との境近くに付き、貼り付け時のヨコナデによってその境が丸くなった部分がみられる。18の皿は灰色を呈し軟質。19から22は土師器甕片である。19は白色を呈し、器面が剥落し、外面には縦ハケがわずかにみられる。20、22は同一個体の可能性がある同形の甕片である。22の大半はカマド煙道付近から出土。外面の頸部の屈曲は緩やかで、体部が張る。外面に細かい縦ハケを明瞭に残す。21もカマド周辺から出土。器面が剥落し、外面のハケメは不明瞭である。M2は鋤先状の鉄器である。刃部の可能性がある部分は錆が著しく断面の形状は判らないが、側縁はカマボコ状である。S3は全体を磨研され、図上の上下両端に敲痕を有す。

SX66

SC18と時期をほぼ同じくし、近接しているため関連が窺える。その規模からは竪穴住居の可能性

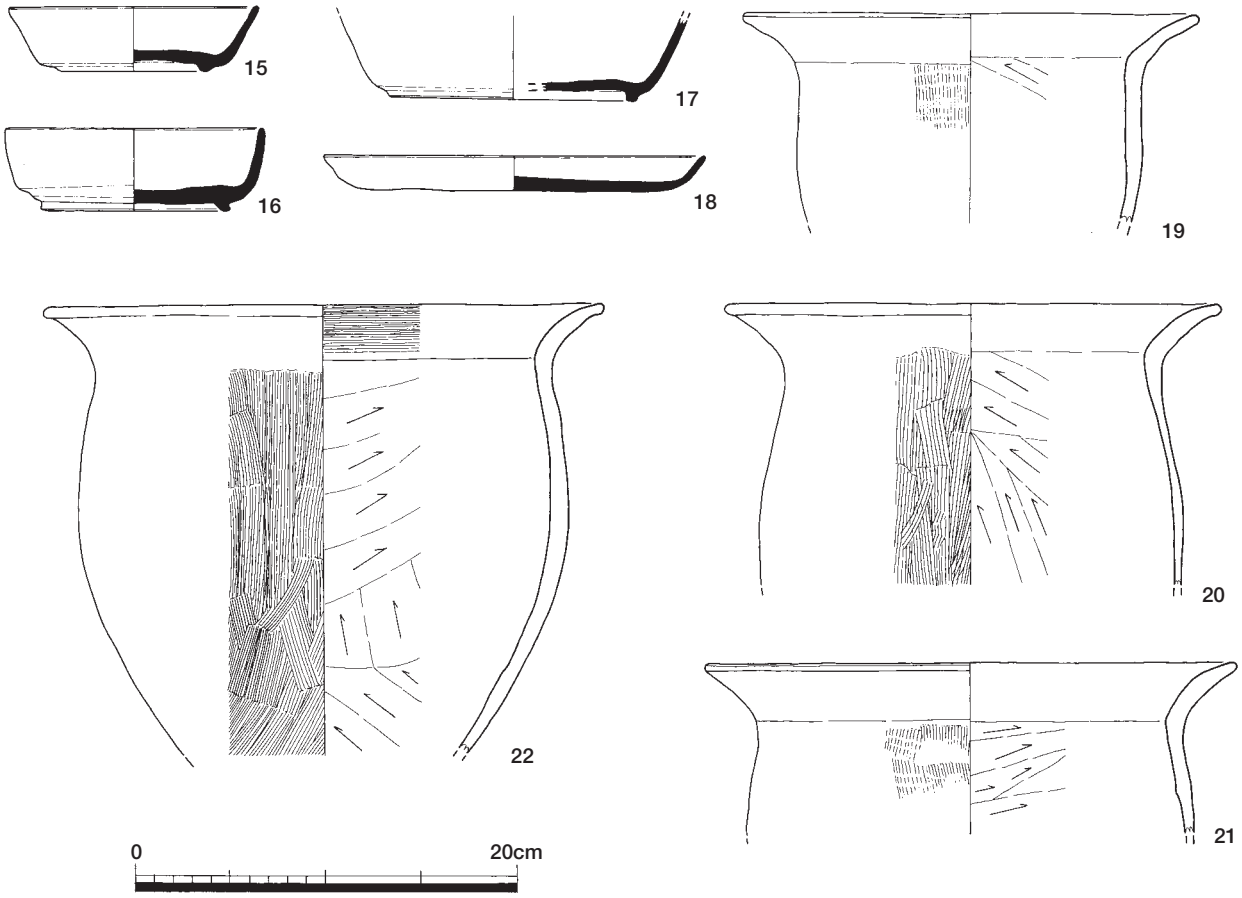


Fig.12　SC18出土土器実測図（1/4）

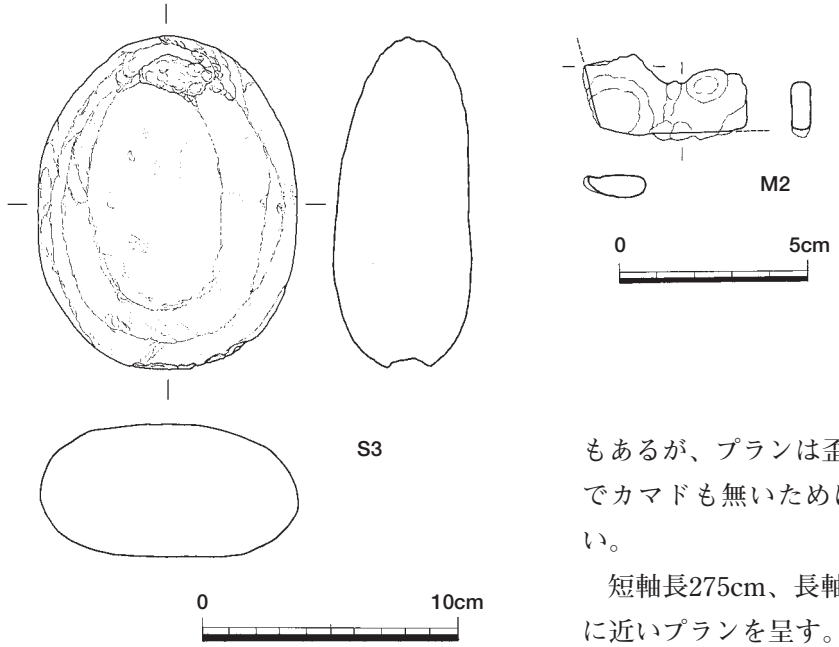


Fig.13　SC18出土石器・鉄器実測図
（1/3、1/2）

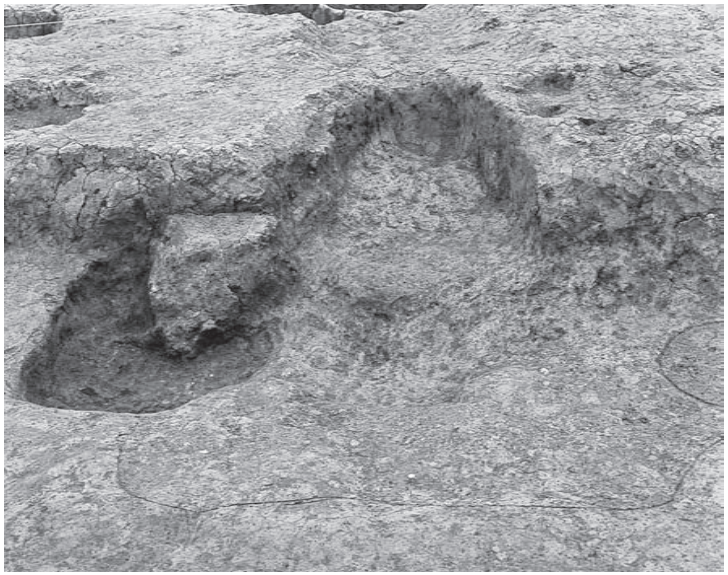
もあるが、プランは歪で、壁の立ち上がりが緩やかでカマドも無いために住居跡にすることはできない。

短軸長275cm、長軸長293cmを測る歪な隅丸方形に近いプランを呈す。上記の通り、立ち上がりは緩やかで、最も深い中央部の深さは15cmを測る。主

Ph.6　SC18完掘（南から）

Ph.7　SC18カマド遺物出土状況（南から）

Ph.8　SX66（南から）



Ph.9　SC18カマド完掘（西から）

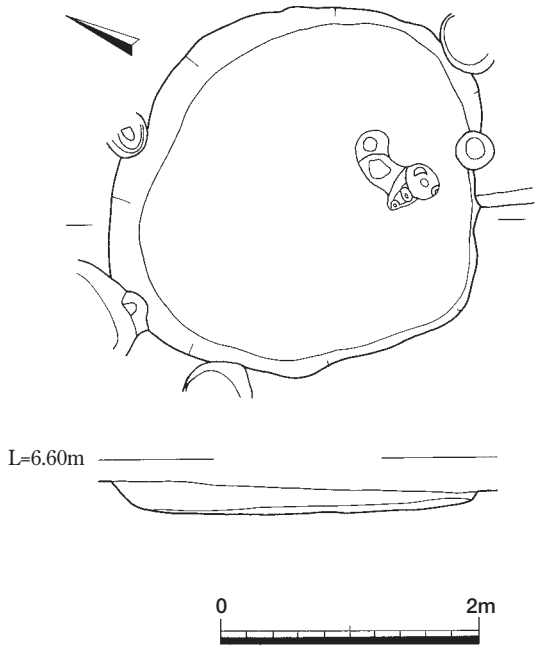


Fig.14　SX66実測図（1/60）

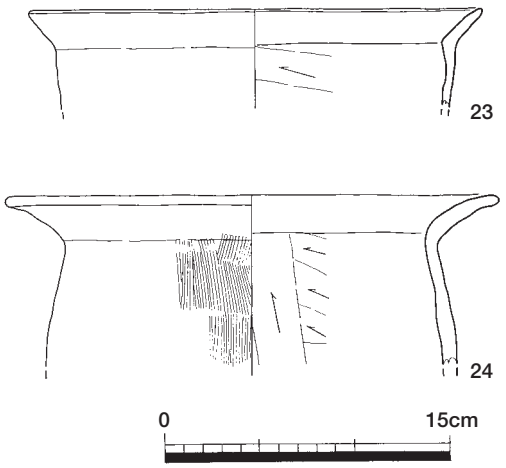


Fig.15　SX66出土遺物実測図（1/4）

柱穴は検出されなかった。

出土遺物

23、24は土師器甕である。23は体部が張らないのに対し、24は体部が膨らみ、外面に縦ハケを明瞭に残す。

（2）溝

SD110

調査区の中央で検出された方形周溝である。幅50～70cm、深さ15～25cmが残る。西側に高く、SC18に切られた東端付近と20cmの比高差がある。断面は上部がロート状に広がった逆台形を呈す。SC108とわずかに切り合った部分があるが、その前後関係は判断できなかった。出土遺物や状況からは方形周溝SD110が切っていると思われる。

また、東辺はSC18に切られているが、SC18の南辺から延長の可能性がある落ち込みがわずかに検出された。この場合、東西辺は溝を含め10.0m前後の規模となる。

溝区画内に径30～40cm、柱痕が径18cmの柱穴が概ね北辺に沿って検出された（SB01）。しかし、南北方向に並ぶ柱穴の中は畝状の溝やこれと同じ明褐色埋土で極めて新しい時期のピットと混在することから方形区画溝に伴った施設には断定できない。

北辺の溝に嵌った位置で井戸SE143が切られていた。SD110はSE143が機能していたと思われる弥生中期後半～後期初頭とは時期的に隔たりがあるが、SE143に向かって東西両方向の底面が傾斜していたことや、SE143中央で傾斜した底面とほぼ同じレベルからSD110の時期と思われる鉢25や丸底壺26が出土したことから、SE143の埋没後も沈み込み凹んだ状態でSD110と関連をもっていたものと考えられる。なお、このSE143の上部は新しい時期まで沈下し続けていたとみられ、畑の畝埋土と同様な均質の明黄褐色土が堆積していた。

出土遺物

25、26は上記のように切り合ったSE143の上部から出土した。25は口縁部をわずかに欠く程度で、ほぼ完形である。外面は口縁端部を仕上げにヨコナデした他は粗いハケメを残す。内面ナデ調整。26

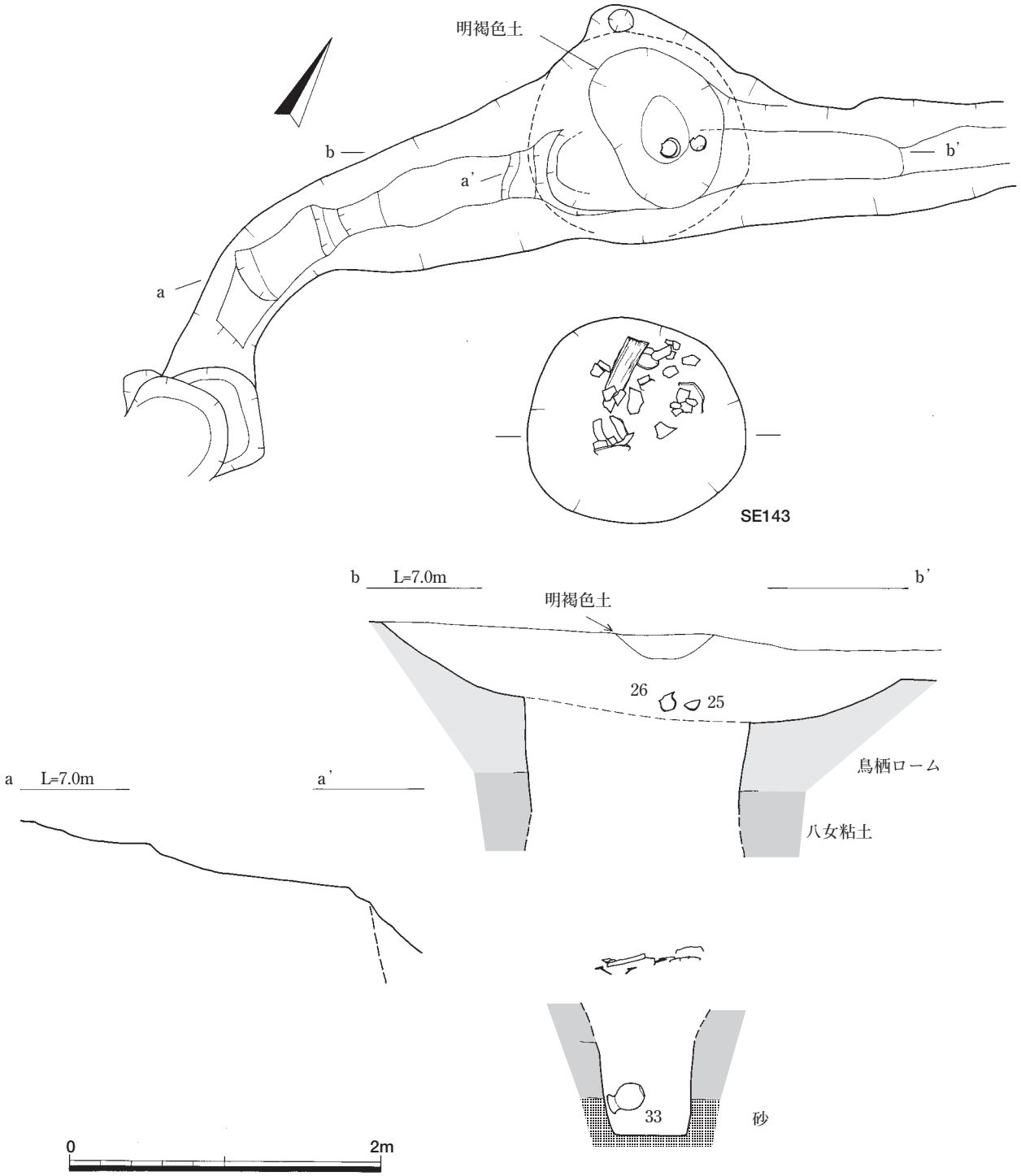


Fig.16　SD110、SE143実測図（1/40）

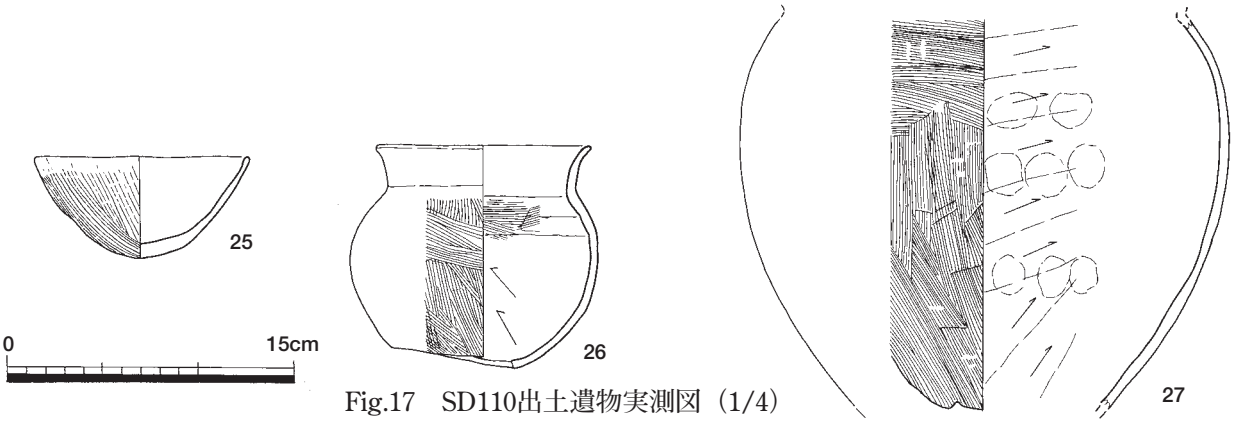


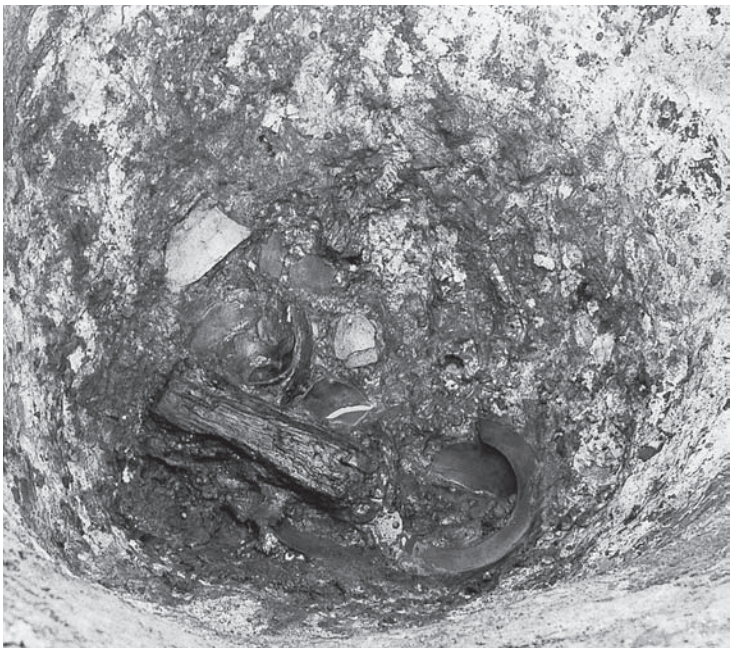
Fig.17　SD110出土遺物実測図（1/4）

Ph.10　SD110（北から）

Ph.12　SD110土層（西から）

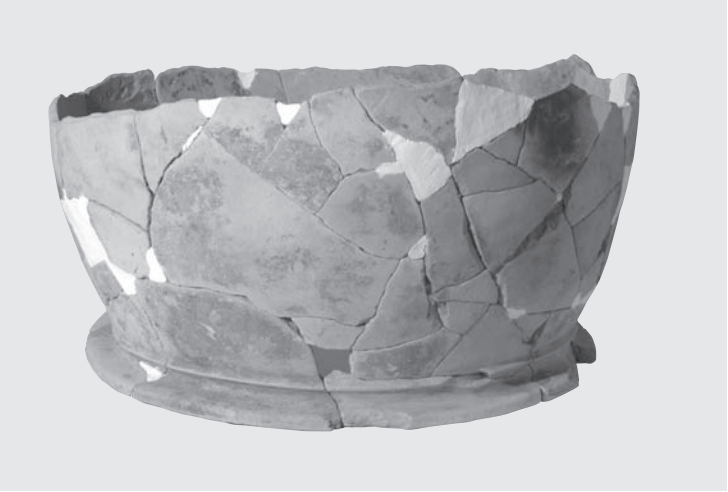
Ph.13　25、26出土状況（西から）

Ph.11　SD110 遺物出土状況（南から）



Ph.14　SE143 遺物出土状況（西から）

Ph.15　SE143 最下底遺物出土状況



Ph.16　SE143出土絵画甕棺

口縁部線刻

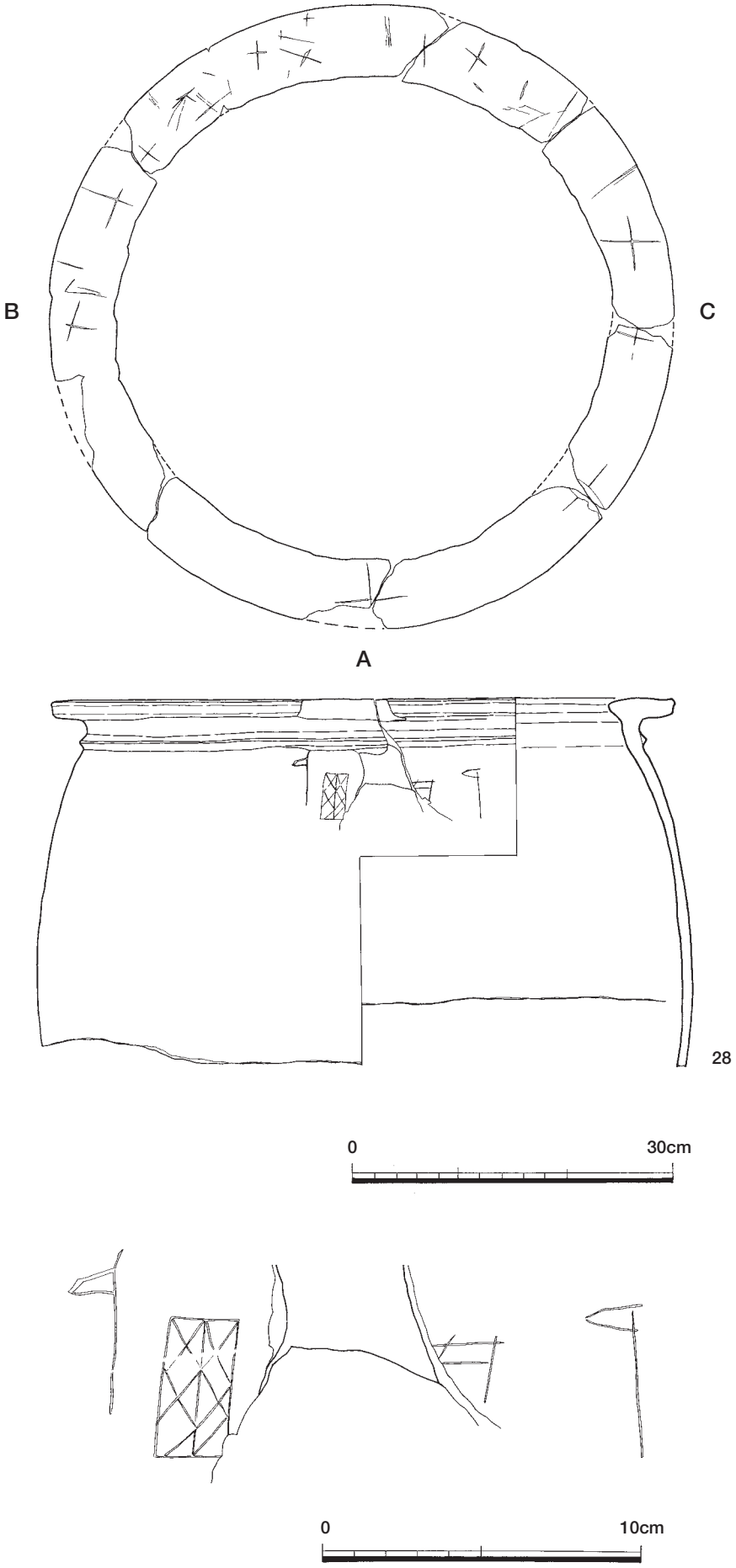


Fig.18　SE143出土絵画土器実測図（1/6、1/2）

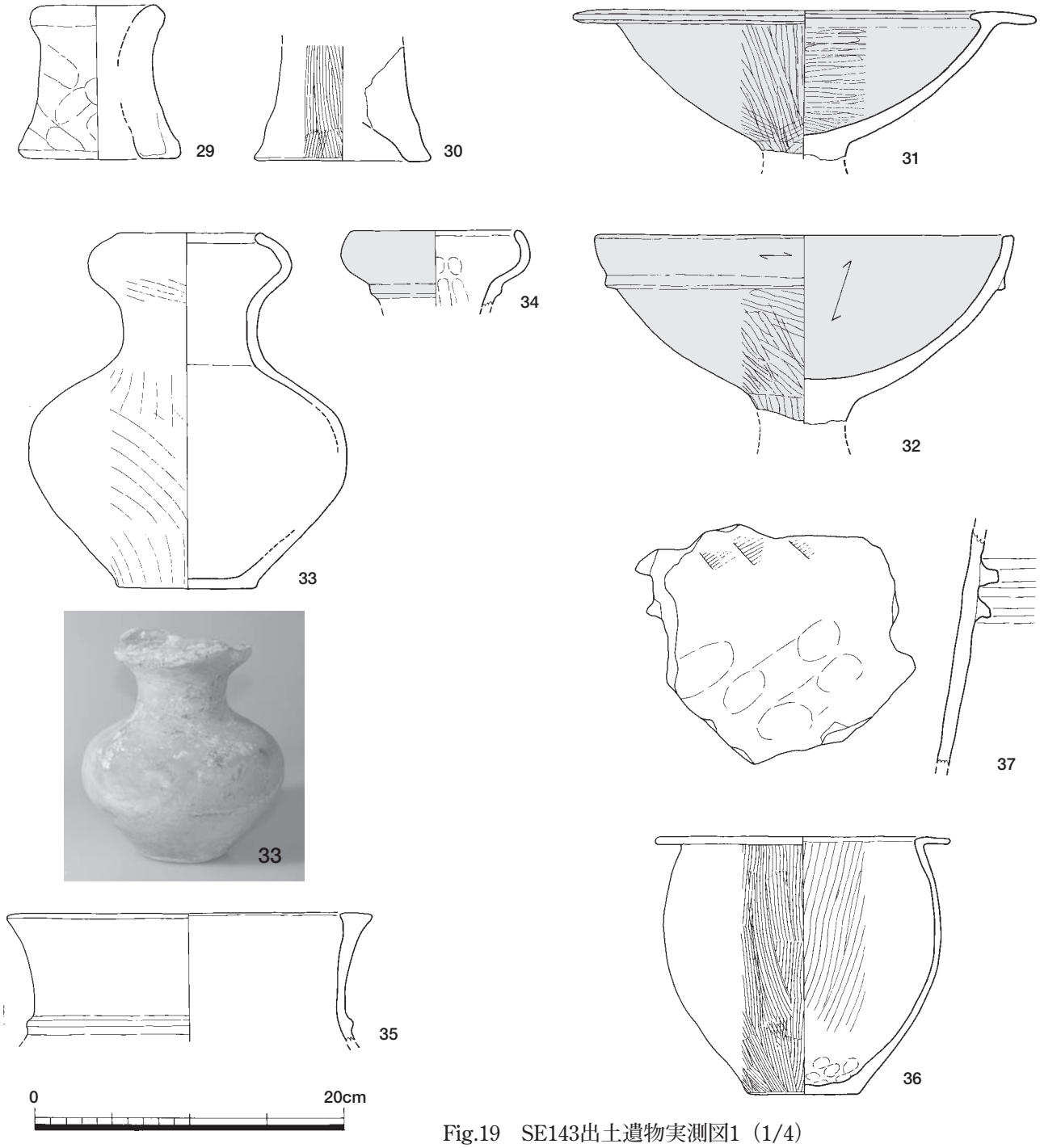


Fig.19　SE143出土遺物実測図1（1/4）

の小形壺は底部を径6cmの円形に打ち欠いている。外面頸部から体部上位はナデが加えられ、ハケメが不明瞭となっている。底部には煤状の炭化物が付着している。27もSE143の上部から出土した甕胴部である。外面上位にヨコハケ、内面は斜位のヘラケズリを施す。

（3）井戸

SE143

SD110の項で記した通りSE143上部はSD110の下底が傾斜して切っている。径130cmの円形プランを呈し、検出した最下底までの深さは3.3mを測る。地山が八女粘土に変わった部分では壁が崩れオーバーハングしている。下底より約1m上から絵画を有した甕棺（28）や木製の槽（W1）をはじめ遺物

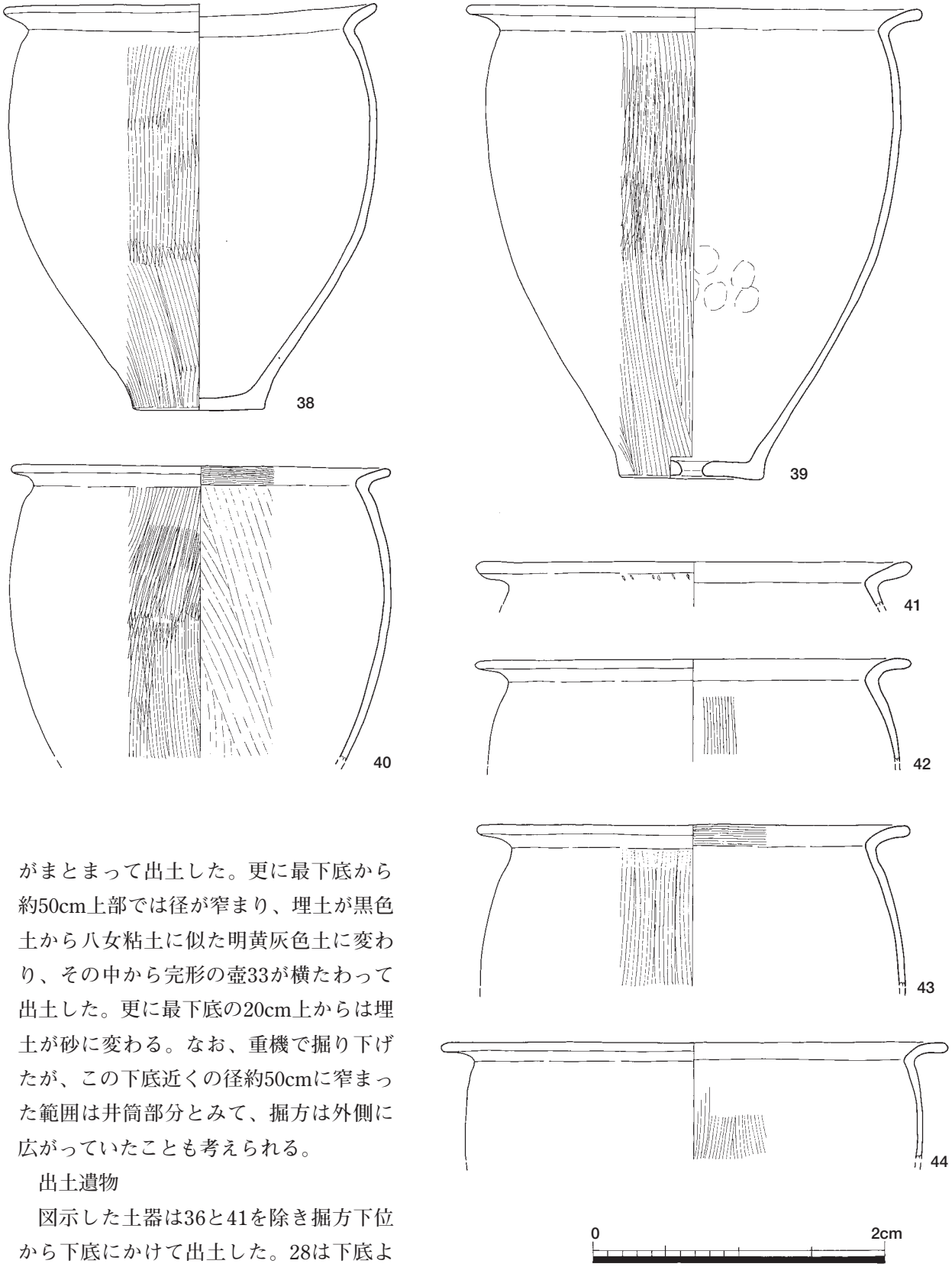


Fig.20　SE143出土遺物実測図2（1/4）

がまとまって出土した。更に最下底から約50cm上部では径が窄まり、埋土が黒色土から八女粘土に似た明黄灰色土に変わり、その中から完形の壺33が横たわって出土した。更に最下底の20cm上からは埋土が砂に変わる。なお、重機で掘り下げたが、この下底近くの径約50cmに窄まった範囲は井筒部分とみて、掘方は外側に広がっていたことも考えられる。

出土遺物

図示した土器は36と41を除き掘方下位から下底にかけて出土した。28は下底より約1m上から他の木器や土器とともに細かい破片で集中して出土した。口径58cmの絵画が線刻された大型甕（甕棺）である。内面に赤色顔料がわずかに付着している。口縁部から35cmの粘土継ぎ目で破砕され、円筒状になっている。井筒としての利用が考えられるが、甕棺を2次

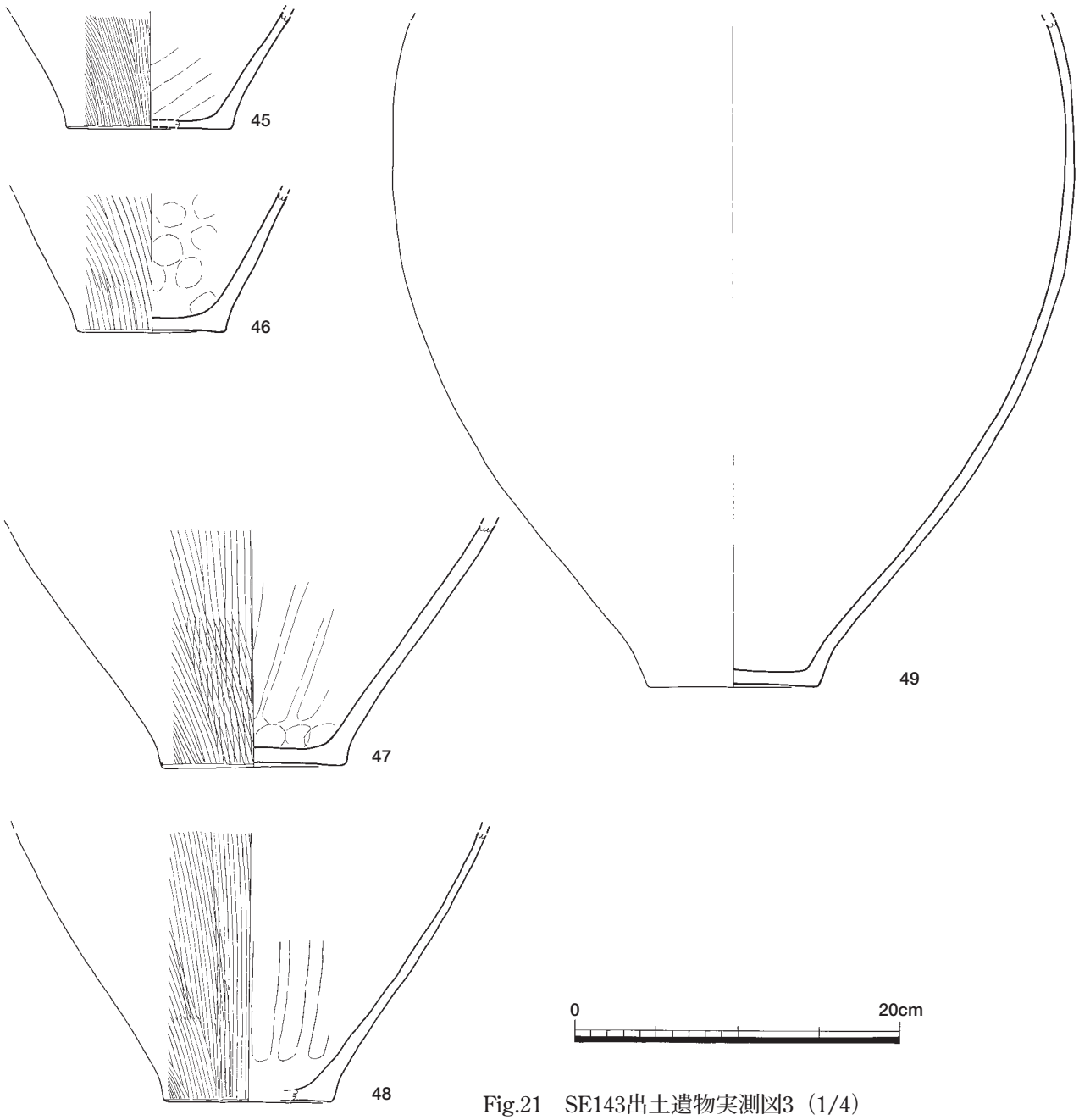


Fig.21　SE143出土遺物実測図3（1/4）

的に利用したものか、井戸施設の専用の土器か確証はないが、絵画が描かれた甕棺例があることから前者の可能性が高い。また、出土位置が下底ではなく浮いたレベルであることや破片が細かいことから意図的に破砕された可能性がある。

口縁部下に焼成後の線刻による絵画が描かれている。左右両端に刃部を同じ左向きにした戈を配し、左側の戈の側に盾、右側の戈の左側は不明の線刻が描かれている。戈は共に刃先が屈曲し、左側の戈の柄頭が刃部より上に伸びているのに対し、右側のものは刃部上端以下の柄のみ描かれている。盾は長方形の枠中央に縦線を入れ、そこを境に×を各2段入れ、最下は斜線のみになっている。その右上部は欠損し、線刻も切れて不明である。盾も考慮したが、下端の横線が無く、左側の盾のように長く縦線も伸びないこと、また、左側の戈が盾と密接な関係を示しているように近接しているのに対し、不明線刻は右側の戈とやや離れていることも盾と考えにくい根拠に挙げられる。可能性としては建物、

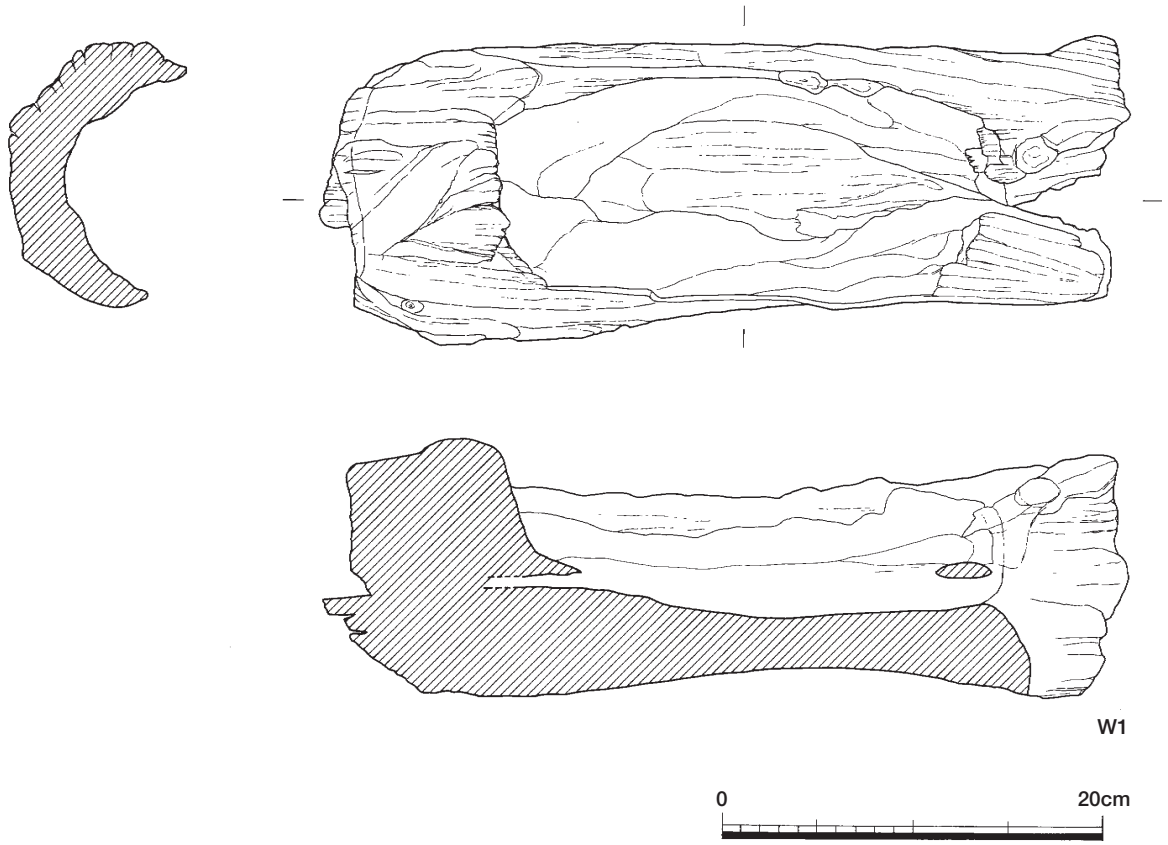


Fig.22　SE143出土木器実測図（1/6）

若しくは動物が考えられるが建物としては高床建物、動物としては鹿が思い浮かぶ。鹿の線刻の場合4本足が多くみられるものの、数少ないが奈良県天理市の清水風遺跡1次出土の壺形土器に描かれた鹿のようにデフォルメされた2本足の表現もみられる。また、2本の横線間に向かって細い斜線がみられるが、突き刺さった槍とも考えられる。

口縁部上面に十や┘の線刻が描かれている。これも焼成後の線刻とみられる。図示したA－Cより上方では細かい線刻が数多くみられ、下方ではその中央のB点に大きめの十字形が刻まれ、その下の胴部に上記の絵画が描かれている。B－Cのほぼ真ん中にも十字が描かれているのに対し、A－B間では確認できない。十や┘の線刻はその向きが口縁の中心に向かい、斜線を組み合わせた×ではなく十字に近い印象を受ける。

29の小形器台は体部下位から接地部にかけて内側の粘土が剥落し、端部は外側から粘土を引き延ばし仕上げている。29は内外面ナデを施すが、30は外面に縦ハケを残す。31は下位の遺物が集中した位置から出土。坏部はほぼ完存する。32は口縁下に断面三角形の突帯を有した高坏坏部である。内底部に径1cmで断面が半球形に近く剥落した部分が6箇所みられる。起因の事由は不明。33は最下底から出土した袋状口縁壺である。口縁部を一部欠損する他は完存する。器面が剥落し、外面の体部下位はハケメを比較的残すが、上位はヨコナデ調整による。34は袋状口縁下に断面三角形の突帯を有す。35

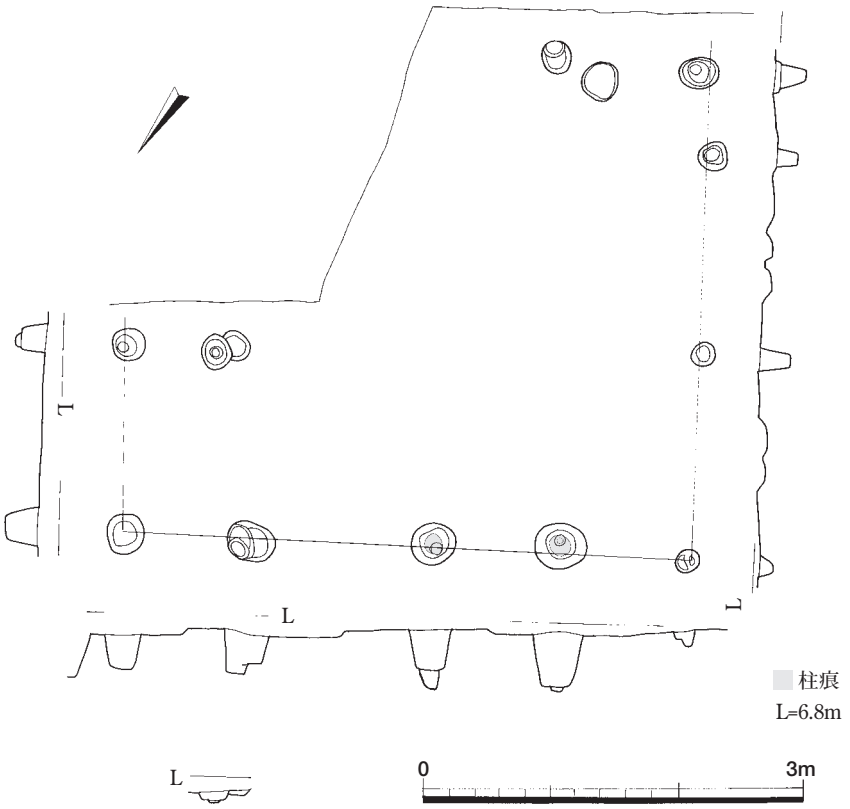


Fig.23　SB01実測図（1/60）

は軟質で、摩耗が著しい。36の小形甕は外面に細かいハケメを明瞭に残し、内面には異なった粗いハケメが上位に施されている。37は断面台形の2条突帯を有した甕片である。38は下位の土器が集中した部分から出土した。細かく割れ、体部が部分的に欠損するが口縁部は全周完存する。39も38と同レベルから下層にかけて出土したが、約半分の遺存である。下底に穿孔がみられる。40の短い口縁部の内面にはハケメが残り、胴部の張りが球形に近くなる。41は口縁端部が肥厚し、その下位に刻み列点を巡らす。42、44は口縁部がやや湾曲して横に延び、胴部最大径も比較的上位にある。45から49は甕底部である。47、49の底部は上げ底気味で、胴部は外湾しながら立ち上がる。

50の木製槽も土器が集中して出土した下底近くから出土した。樹種は鑑定していないが、芯持ち材を方形に刳り抜いている。全長43cm、幅15cm。

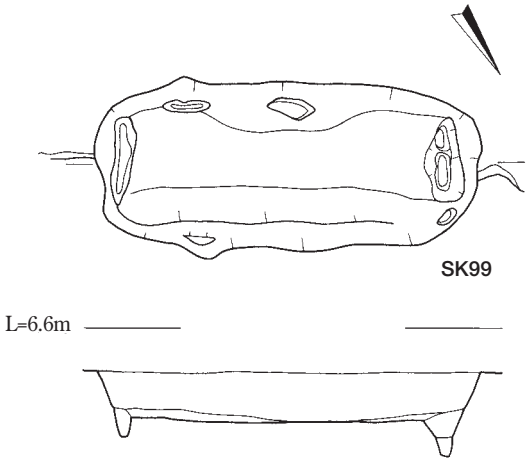
（4）土壙、その他

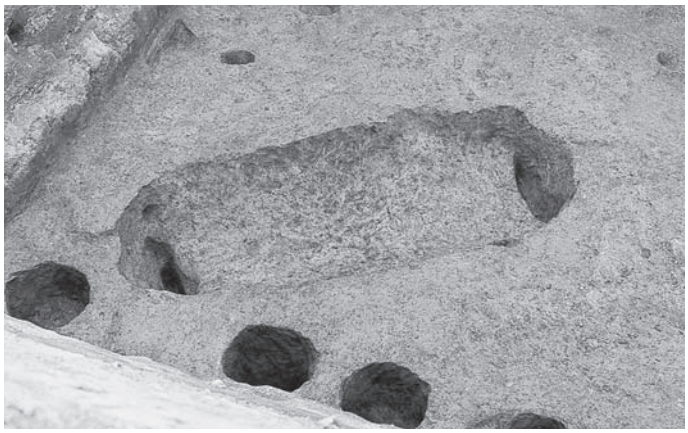
SB01

方形周溝SD110内で検出された。柱列の方位がSD110とほぼ同じくする。北面する柱列は径40cmの掘方に径14～18cmの柱痕が検出された。これに対し、西面する柱列は小さく浅い。位置や方向からSD110に関連した施設とも考えられるが西側の浅い柱穴は同じ方向をとる中世以降の新しい時期の明黄褐色埋土からなる畝状の溝やピットと混在していることから、時期が降る可能性もある。

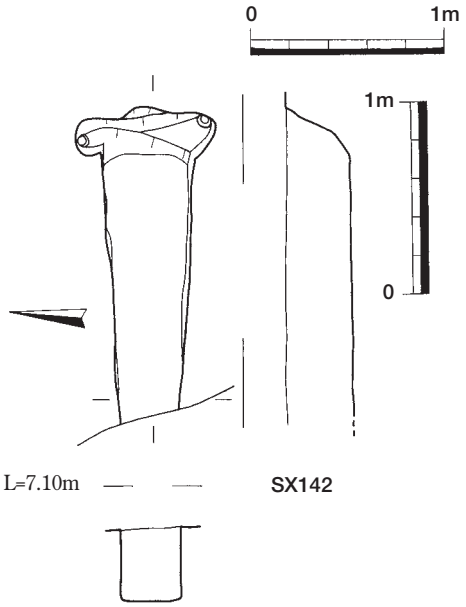
SK99

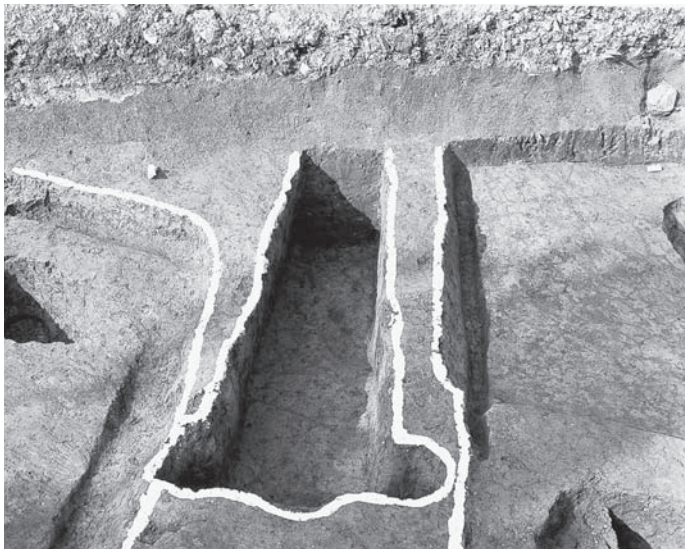
調査区北端で検出された木棺墓である。主軸方位はN-30°-Eをとる。掘方上端は長軸長200cm、短軸長85cmを測り、両小口に木板を差し込んだとみられる長さ45cmの掘り込みが検出された。深さは



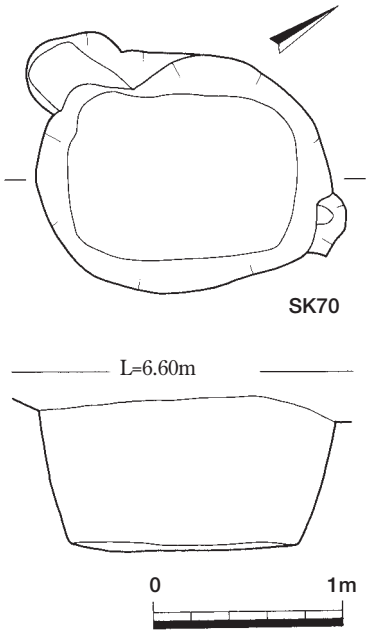


Ph.17　SK99 完掘（南西から）





Ph.18　SX142 完掘（東から）



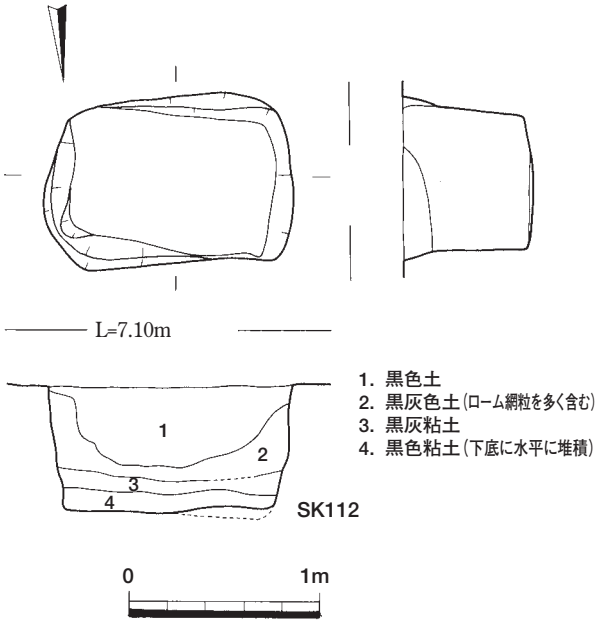


Fig.24　SK99、142、70、112実測図（1/40）

南側が約10cmであるのに対し、北側は20cmと深い。木棺の長軸長は160～170cmを測る。

SX142

調査区西際でSC106とSC108と方位を同じくし、挟まれた位置に延びる。黒褐色土の埋土で分層が難しい。深さ33cmを測り、底面は平坦で水平である。両側縁は直に近い壁となり、東端のコーナーの張り出した位置に小ピットが検出された。出土遺物は弥生土器の小片のみであるが、先述の住居跡と近い時期であることは確実である。

SK70

調査区北東寄りで検出された。上端は125×155cmの楕円形に近いプランであるが、下端は90×120cmの方形プランを呈す。主軸方位は木棺墓のSK99と直交するが、関連は不明。深さ80cmを測り、底面は平坦である。出土遺物は少なく弥生土器小片のみである。

SK112

調査区西寄りで検出された略方形の土壙である。長軸長125cm、短軸長90cm、深さ70cmを測る。主軸方位がSC106、SC108と近似する。最下層に厚さ約10cmの黒色粘土が水平に堆積し、上部は黒色土で分層が難しかったがレンズ状の堆積とみられる。遺物は弥生土器細片を少量出土。

Ⅳ　終わりに

1.方形周溝SD110について

検出された遺構は弥生終末～古墳初頭と奈良時代の2時期に大別される。18年度に隣接した第112次調査が実施され両時期の遺構の広がりがみえてきたので、構成等についてはその報告に委ねるが、第112次で検出された方形周溝は墓以外もみられるということである。

本報告の方形周溝SD110は祭祀行為が行われた祭殿等の施設であった可能性が高いと思われる。確定はできないが、溝に沿った柱列が検出され、時期に隔たりがあるが絵画甕棺を井筒にした可能性が高い（模擬的かもしれないが）井戸SE143が周溝に重複していることなどが根拠にあげられる。方形周溝SD110の下底がSE143に向かって傾斜していたことや、祭祠に用いた土器25、26がSE143の直上に埋置されていたことから時期差があるものの関連していたと思われる。当初、木柱の可能性も考えたが、柱痕跡等は検出されなかった。

SE143出土甕棺に描かれた絵画について

絵画自体については本文中に述べたので類例をもとに再度検討し、若干の解釈を加えてみたい。まず、甕棺の時期であるが、弥生中期後半に位置づけられるもので、比較的具象的な絵画が見られる時期でもある。また、胴部上位の口縁部直下に近い位置も他例に多く見受けられる。

絵画の左側の戈と盾は近接しセットになっている。想起されるのは奈良県清水風2次出土の壺形土器に描かれた鳥装の司祭者が手にした戈と盾である。SE143出土のものは司祭者が省略されたものと見ることもできる。また、右側の戈の左側に描かれたものは高床式倉庫などの建物もしくは矢か槍を負った鹿を想定した。何れにせよ、かなり簡略化された図と思われる。しかし、同様の絵画土器にもみられるモチーフは明確に表現している。

また、口縁部に刻まれた十若しくは×についての意味を明確にすることは困難であるが、絵画の位置を意識し、一部、割り付けたような位置と形状が見受けられる。甕棺口縁部に×印がある類例は比較的多く辟邪を意識しているように思われるがそのモチーフは今後の検討課題である。

報告書抄録

ふ り が な	なか
書　　名	那珂47
副　書　名	那珂遺跡群第109次調査報告
巻　　次	47
シ リ ー ズ 名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第937集
編 著 者 名	荒牧宏行
発 行 機 関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒810－8621　福岡市中央区天神１－８－１　TEL 092－711－4667
発 行 年 月 日	2007年（平成19年）3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかいせきぐん 那珂遺跡群 第 109 次	ふくおかしとうこうじまち 福岡市東光寺町 90番	40130	0085	33°34′ 21″	130°26′ 19″	20050822 ～ 20051109	198	共同住宅建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
那珂遺跡群 第109次	集落	弥生中期末、弥生終末～古墳初頭、奈良	井戸1、竪穴住居跡4、方形周溝1	弥生土器、土師器、須恵器	弥生中期末の井戸から盾と戈を描いた甕棺片が出土した。

遺跡概要	集落－弥生時代－井戸1＋竪穴住居跡3－弥生土器／集落－古墳－方形周溝1－土師器／奈良時代－竪穴住居跡1＋土壙1
要約	那珂遺跡の西際に位置し、御笠川と近接する。弥生後期後半～終末にかけての竪穴住居跡と古墳初頭の方形周溝が切り合っている。この方形周溝と切り合った弥生時代中期末の井戸下部から盾と戈を描いた甕棺片が出土した。 奈良時代の竪穴住居跡と土壙が検出され、付近に官道が推定されていることから、立地上の関連が注意される。

那　珂　47

－那珂遺跡群第109次調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第937集

2007年（平成19）年３月30日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８－１
☎（092）711－4667

印　刷　株式会社ナガシマ
福岡市博多区豊一丁目９－18
☎（092）482－7751